

日々のあゆみ 第二集

目次

アンドリュー・マーレー

27章 サタンの力……………3
28章 キリスト者の戦い……………9

主は生きておられます！

キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかつています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見ゆかぬです。

(一三ハネ3・2)

キリストは、万物を「自身に従わせる」とのできる御力によりて、私たちの卑しいからだを、「自身の栄光のからだと區じ縫に変えて下だせনのです。(ヨハネ3・21)

30章 個人の働き……………19	29章 祝福となる……………14
31章 伝道の働き……………24	
32章 光と喜び……………29	
33章 いらいめ……………34	
34章 祈り……………38	
35章 祈り合……………43	
36章 主を惑わるゝ人……………48	
37章 一心で献身する……………53	
38章 信仰の保証と確信……………59	
39章 イエスさまに似たるもの……………63	

The believer's new life
by Andrew, Murray
Copyright (c) 1965, 1984
Published by Bethany House Publishers

私のうちで、思い煩いが増すときに、あなたの慰めが、私のたましいを喜ばしてくださいますように。

(詩94・19)

わがたましいよ。なぜ、おまえは絶望しているのか。御前で思い乱れているのか。神を待ち望め。(詩42・5)

私たちは、「この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

(2コリ4・7、17)

あなたがたは、あらゆる努力をして、信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には敬虔を、敬虔には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。

(2ペテ1・5～7)

どうか、平和の主「自身が、どんなばあいにも、いつも、あなたがたに平和を与えてくださいますように」。

(2テサ3・16)

27 サタンの力

シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦の

ようにふるいにかける」とを願つて聞き届けられました。

しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのためには祈りました。だからあなたは、立ち直つたら、兄弟たちを力づけてやりなさい。

(ルカ22・31、32)

敵が隠れたままであつたり、忘れられたままでいるという事実ほど、敵を危険なものとすることはあります。キリスト者の三つの大きな敵は、この世、肉、悪魔（サタン）ですが、中でも悪魔は最も危険です。なぜなら、厳密に言うと、それらの敵たちが持つどんな力でも、その力を貸し与えるのは悪魔であるからと、いうだけでなく、悪魔が目に見えないために、ほとんど知られることがなく、恐れられることもなきからです。悪魔は暗闇の力を持つています。悪魔は人の目を暗くして、人が悪魔に気付かないようにします。悪魔は闇をまとい、見られないようにします。悪魔は光の天使として現れる力すら持つています。

そなばあい、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかる福音の光を輝かせないようにしているのです。（2コリ4・4）

しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。（2コリ11・14）

聖書が悪魔の正体を暴露しているように、キリスト者は、見えない事柄を認識させる信仰によつて悪魔を知る努力をしなければなりません。

主イエスさまが地上で生活しておられたとき、主の偉大なみわざは悪魔を征服することでした。主がバプテスマをお受けになつた時、主は聖靈に満たされました。聖靈に満たされたことで主は、悪霊の世界の頭である悪魔との接触に導かれました。そして悪魔に打ち勝ちました。

さて、イエスは、悪魔の試みを受けるため、御靈に導かれて荒野に上つて行かれた。

イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」

(マタ4・1、10)

そのとき以来、主の目は悪魔の力と働きをいつも感じ取つておられました。主はあらゆる罪と苦悩の中に、（主の王国と）同様の悪魔の力強く邪悪な王国の支配があることを、明らかにされました。悪霊にとりつかれた人だけではなく、病にかかっている人の中にも、神と人の敵を見られました。

しかし、わたしが神の御靈によって悪靈どもを追い出して
いるのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ている
のです。

(マタ12・28)

み」とばが道ばたに躊かれるとは、「ういう人たちのこと
です…み」とばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに躊か
れたみ」とばを持ち去つてしまつのです。(マル4・1
5)

この女はアブラハムの娘なのです。それを十八年もの間サ
タンが縛っていたのです。

(ルカ13・16)

それは、ナザレのイエスのことです。神は「の方に聖靈と
力を注がれました。このイエスは、神がともにおられたの
で、巡り歩いて良いわざをなし、また悪魔に制せられてい
るすべての者をいやされました。

(使10・38)

主に十字架を避けるようにペテロが忠告したこと、また彼
が主を否んだことを、私たちはそれを単にペテロの生まれ
ながらの性質を明らかにされたことと考えますが、イエス
さまはそこに悪魔の働きを見られました。

しかし、イエスは振り向いて、ペテロに言われた。「下が
れ。サタン。あなたはわたしの邪魔をするものだ。あなた
は神のことを思わないで、人のことを思つてはいる。」

(マタ16・23)

さて、十二弟子のひとりで、イスカリオテと呼ばれるユダ
に、サタンがはいった。

(ルカ22・3)

主「自身が苦難を受けられたことについて、私たちは人の
罪と神がそれ（主の苦難）を許容されたことを語ろうとし
ますが、イエス様は闇の力を認められました。イエスさま
のご生涯と死におけるすべてのみわざは、悪魔のわざを破
壊することでした。そしてまた主は、そのご再臨の時に悪
魔を完全に滅ぼされるのです。

イエスは言われた。「わたしが見ていると、サタンが、い
なずまのように天から落ちました。」(ルカ10・18)

今がこの世のさばきです。今、この世を支配する者は追い
出されるのです。

(ヨハ12・31)

平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み
碎いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵み
が、あなたがたとともにありますように。

(ロマ16・20)

神は、キリストにおいて、すべての支配と権威の武装を解
除してさりしものとし、彼らを捕虜として凱旋の行列に加
えられました。

(ローマ2・15)

その時になると、不法の人が現われますが、主は御口の息をもつて彼を殺し、来臨の輝きをもつて滅ぼしてしまわれます。不法の人の到来は、サタンの働きによるのであります。あらゆる偽りの力、しるし、不思議がそれに伴い、また、滅びる人たちに対するあらゆる悪の欺きが行なわれます。なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかつたからです。 （2テサ2・8～10）

罪のうちを歩む者は、悪魔から出た者です。悪魔は初めから罪を犯しているからです。神の子が現われたのは、悪魔のしわざを打ちこわすためです。 （1ヨハ3・8）

ペテロに対するイエスさまのことばは、主の個人的な経験と較べることで、敵の働きについての恐るべき洞察を私たちに与えてくれます。「悪魔はあなたを我が物にしようと、しきりに求めています。」と、イエスさまは言われます。「ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを搜し求めながら、歩き回っています。」と、ペテロ自身が後ほど語っています。

互いの権利を奪い取ってはいけません。ただし、祈りに専心するために、合意の上でしばらく離れていて、また再びいつしょになるというのならかまいません。あなたがたが自制力を欠くとき、サタンの誘惑にからないためです。 （1コリ7・5）

もしあなたがたが人を赦すなら、私もその人を赦します。私が何かを赦したのなら、私の赦したことは、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。これは、私たちがサタンに欺かれないと、私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。 （2コリ2・10、11）

悪魔は、無限の力は持つてはいませんが、あらゆる弱点や無防備な瞬間を利用することにいつもやつきになつています。「サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかける（ルカ22・31）」とは何という描写でしょうか！この世界は、そうですキリストの教会でさえ、サタンの脱穀場なのです。穀物は神のものであり、糲殻は悪魔のものです。悪魔は頻繁にふるいをかけてきます。そして、ふるいから落ちたものをすべて我が物にしようと努力します。恐るべきやり方でふるい落とされて、主のとりなしに無ければ永遠に滅びることになつてしまふ多くの信仰者がいるのです。

このような者をサタンに引き渡したのです。それは彼の肉が滅ぼされるためですが、それによって彼の靈が主の日に救われるためです。 （1コリ5・5）

悪魔は一つといわず、多くのふるいを持つています。第一のふるいは、全般的に世俗的であること、つまりこの世を愛することです。多くの人が貧しいときには信仰深くなりますが、彼らが豊かになるや、世のことのために熱心に奮

闘するのです。あるいは、回心と覚醒のときには彼らは熱心に見えても、この世の心遣いを通して迷わされてしまうのです。

(悪魔は) 言つた。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」イエスは言われた。「引き下がれ、サタン。『あなたの神である主を拝み、主にだけ仕えよ。』と書いてある。」 (マタ4・9)

また、いぱらの中に躊かれるとは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の惑わしことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。 (マタ13・22)

第三のふるいは、自信であり、これは大変危険なものです。聖靈に従うといいながら、実は自分自身の心の思いに聞き従っているのです。彼は主のために熱心ですが、それは肉的な熱心であって、そこには神の子羊のやさしさが見られません。気づかない内に、肉の活動が聖靈の働きの中に混ざってきます。悪魔にうち勝っていることを誇つていて、実際に、実際は密かに悪魔の罠にかかっているのです。

あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御靈が始まつたあなたがたが、いま肉によつて完成されるというのですか。 (ガラ3・3)

兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもつて互いに仕えなさい。 (ガラ5・13)

そのことによって、神の子どもと悪魔の子どもとの区別がはつきりします。義を行なわない者はだれも、神から出た者ではありません。兄弟を愛さない者もそうです。

ああ、何とこの地上の生活は危険であることでしようか。そこでは、悪魔が教会(集会)においてすら脱穀場を設けることを、神は許しておられるのです。深い謙遜と恐れとおののきをもつて、自分自身を信用しない人は幸いです。私たちの唯一の安全は、悪魔を征服されたイエスさまのとしと導きの中にあるのです。

兄弟を憎む者はみな、人殺しです。いうまでもなく、だれでも人を殺す者のうちに、永遠のいのちがとどまっていることはないのです。 (1ヨハ3・10、15)

終わりに言います。主にあって、その大能の力によつて強められなさい。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、二

の暗やみの世界の支配者たち、また、

天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによつて、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができす。

(エペ6・10、12、16)

私たちは悪魔のすべての深みを知つてゐるとの思いから離れ、悪魔のすべての狡猾な策略にも対抗できる者となりますように。悪魔が働き、力を發揮するのは、見えるものにおいてと同様に靈の領域において、見えないものにおいてです。私たちは見えるものにおいては悪魔を知つてうち勝つことができても、見えない靈の領域において悪魔が私たちにうち勝つのではないかと恐れましよう。

私たちの唯一の安全が、私たちの短所や弱さを自覚して、へりくだつた心を持つ人たちを確かに守られ、主に全き信頼をおくことができるようだ。

一、悪魔の存在を知ることが、どんな慰めを私たちに与えてくれるのでしようか？私たちはその認識から、罪とは私たちの本性に注入された異質な力に由来するものであつて、私たちの中にもともとあつたものではないことを知ります。また悪魔が主イエスさまによつて完全に敗北したことと、その結果、私たちがキリストに信頼して留まり続ける限り、悪魔は私たちに對して何の力も持たないことを知るのです。

どうか、あなたにあるということがどういうことなのか、ただ私たちに属するすべてと肉の思いを克服するはどういうことなのか、そして弱さとつしましさの中で強くなるとはどういうことなのかを私たちに教えてください。そして悪魔のあらゆるとりでに対抗する信仰の戦いを、祈りに持ち込むことを私たちに教えてください。なぜなら、あなたが悪魔を私たちの足下にうち碎かれることを知つてゐるのですから。アーメン。

課題

主イエスさま。私たちが敵とその欺きを知るために、私たちの目を開いてください。悪魔と惡魔の領域を知つて、私たちが惡魔に關係あるすべてのものを恐れるようにしてくれ

祈り

とのように見えて、私たちにとつて危険でないものは一つとしてありません。あらゆる物事において、たとえ法にかなつた正しいことであつても、私たちが悪魔の力から自由でありつづけようとするなら、聖靈によつて導かれ、聖別されていなければなりません。

三、悪魔は惡の靈です。善き靈である神の御靈によつてのみ、私たちは悪魔に抵抗することができるのです。悪魔は目に見えないところで働きます。悪魔と戦うためには、私たちには祈りによつて目に見えないところへ入り込まなければなりません。悪魔は力ある君主です。もつと力強い主の御名と、主との親しい交わりにおいてのみ、私たちは悪魔にうち勝つことができるのであります。

四、失われた人々を求める仕事——サタンの力から人々を救い出す戦いは、何と栄光ある働きでしようか。

それは彼らの目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、わたしを信じる信仰によつて、彼らに罪の赦しを得させ、聖なるものとされた人々の中につて御國を受け継がせるためである。 (使26・18)

五、默示録には、悪魔に対する勝利は子羊の血による、と書かれています。

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝つた。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかつた。 (黙12・11)

多くのキリスト者もまた、誘惑には何の力もないことを証明してきました。なぜなら人が血に訴えるとき、悪魔は即座に退却するからです。血によつて罪が完全に帳消しにされ、こうして私たちは、悪魔の力から完全に解放されるとを知ることができます。

28 キリスト者の戦い

努力して狭い門からはいりなさい。

(ルカ13・24)

信仰の戦いを勇敢に戦いなさい。

(1テモ6・12)

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。

(2テモ4・7)

これらのみことばは、二種類の戦いについて述べています。第一の戦いは、「努力して狭い門からはいりなさい。」という変更されることのない事柄についてのものです。扉を開けて入るのは一瞬の動作です。罪人は、入るのにその全生涯にわたって懸命に努力する必要はないのです。その人は、ただちにそれをすべきです。彼は何物にも自分を引き留めることを許さず、入らなければなりません。

わたしは門です。だれでも、わたしを通ってはいるなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。

(ヨハ10・9)

こういうわけで、その安息にはいる人々がまだ残つてお
り、前に福音を説き聞かされた人々は、不従順のゆえには

それとも、私たちは主のねたみを引き起^シ「そうとするので
すか。まさか、私たちが主よりも強いことはないでしょ
う。」

(1コリ10・22)

いれなかつたのですから、神は再びある日を「きょう。」と定めて、長い年月の後に、前に言われたと同じように、ダビデを通して、「きょう、もし御声を聞くならば、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」と語られたのです。

(ヘブ4・6、7)

それから、生涯にわたる第二の戦いがやつて来ます。狭い門から新しい道に出ました。新しい道には、なお多くの敵がいます。この生涯にわたる戦いについてパウロは、「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。(2テモ4・7)」と言っています。

絶え間のない戦いについてパウロは、「信仰の戦いを勇敢に戦いなさい。(1テモ6・12)」と訓示しています。

この二つの戦いについては、多くの誤解があります。多くの人は、その生涯にわたって主と主の召しに逆らいます。そして彼らには平安がなく、内面の戦いを感じているのです。彼らはこれがキリスト者の戦いであると考えるのであります。彼らは欺かれています。これは、喜んですべてを手放して、自分自身を主に明け渡すことをしない人の戦いです。

これは、主が私たちをそこに導き入れようとされる戦いではありません。主は、（救いに）入るための戦いは何年にもわたつて続くような戦いではないと言われます。いいえ。主はあなたが、あなたを引き留めようとする敵を突き抜けて、ただちに入ることを望んでおられます。

それから、生涯耐え忍ぶべき第二の戦いがやつてきます。パウロは二度これを、「信仰の戦い」と呼んでいます。

その主な特徴は信仰です。戦闘における主な要素は信じることであり、それによつて行動することであることを理解している人は、勝利するでしよう。パウロが別の箇所でキリスト者に対して、「これらすべてのもののに、信仰の大盾を取りなさい。それによつて、悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。（Hペ6・16）」と語つている通りです。

神こそ、わが岩。わが救い。わがやぐら。私は決して、ゆるがされない。おまえたちは、いつまでひとりの人を襲うのか。おまえたちはこそつて打ち殺そうとしている。あたかも、傾いた城壁か、ぐらつく石垣のように。

なぜなら、神によつて生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝つた勝利です。世に勝つ者とはだれでしょう。イエスを神の御子と信じる者ではありませんか。（1ヨハ5・4、5）

それでは、この「信仰の戦い」とは何を意味するのでしょうか？私が戦う限り、主は私を助けてくださるということを信じるべきだ、ということでしょうか？いいえ。しばしばそのように理解されてはいますが、そうではありません。

戦いにおいては、とりですなわち攻め取ることのできない要塞に私がいるということが極めて重要です。そのようなとりでに居ることで、弱い守備隊が強力な敵に対抗することができます。キリスト者としての私たちの戦いは、今やもう要塞へ行くこととは何ら関係がありません。そうではなくて、私たちは既にそこに入つており、今はその中にいるのです。私たちがその要塞の中に入つて、今はその中には征伐されることはありません。とりで（要塞）とはキリストです。

終わりに言います。主にあつて、大能の力によつて強められなさい。（Hペ6・10）

信仰によって、私たちはキリストの中にいるのです。敵が私たちの要塞に向けて進攻することはできないと、私たちは信仰によつて知るのです。

悪魔の策略はすべて、要塞の外へ出るよう私たちをそそのかし、広い平原で私たちが悪魔と戦うように仕向けてきます。そこではいつも悪魔が勝利するのです。しかし、私たちが信仰のみによつて戦うなら、そのとき悪魔は主を相手にしなければならず、主が戦われて勝利されるので、私たちが勝利するのです。「**私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝つた勝利です。**（ヨハネ5・4）」

わたしがこれらのことあなたがたに話したのは、あなたがたがわたしにあつて平安を持つためです。あなたがたは、世にあつては患難があります。しかし、勇敢であります。わたしはすでに世に勝つたのです。

（ヨハネ16・33）
しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通じて、キリストを知る知識のかおりを放つてくださいます。

（コリント2・14）

勝利がただ信仰によるのであり、信仰の戦いが良い戦いであるわけは主イエスさまにあります。イエスさまが勝利を買い取られ、イエスさまだけが敵に対する力と支配権を与えてくださるお方だからです。もし私たちが主の中にお

り、主の中に留まり、主の中に生きるために自分自身を明け渡し、そして信仰によつて主がそうであるとおりのものを自分のものとするならば、勝利は自ずから私たちのものであるのです。そのとき私たちは、「戦いはあなた方のものではなくて主のものである。あなた方の神である主があなた方のために戦われる。あなたがたは黙つていなければならない。（出14・13、14）」というみことばを理解します。私たちが神に逆らつては自分自身でどんな良いことも成し遂げることができませんが、キリストにあるなら神をお喜ばせし、それは悪魔に敵対することです。私たちは自分自身では何も成し遂げることはできませんが、キリストにあるなら私たちは、征服者以上の者であるのです。信仰によつて私たちは、神の御前に義なるお方である主にあつて立ち、主にあつて私たちは私たちの敵に対して強いのです。

この光によつて旧約聖書、特に詩篇の中のすべての気高い箇所を読み、私たちの宿るべきところを持つことができます。そこにおいては、主の民に代わつてなされる神の輝かしい戦いが語られています。恐れ、無気力、不安は私たちを弱くし、勝利を得ることができません。生ける神を信じることがすべてなのです。

彼らに言いなさい。「聞け。イスラエルよ。あなたがたは、きょう、敵と戦おうとしている。弱気になつてはならない。恐れではならない。うろたえてはならない。彼らのことでおじけてはならない。

つかさたちは、さらに民に告げて言わなければならぬ。恐れて弱気になっている者はいないか。その者は家に帰れ。戦友たちの心が、彼の心のようにくじけるといけないから。」

（申20・3、8）

そこで、民はときの声をあげ、祭司たちは角笛を吹き鳴らした。民が角笛の音を聞いて、大声でときの声をあげるや、城壁がくずれ落ちた。そこで民はひとり残らず、まつすぐ町へ上つて行き、その町を攻め取つた。

（三シ6・20）

キリストにあつてこの真理は、今やさらに現実であるのです。神は近くに来ておられます。神の力は、信じる私たちの内に働きます。私たちのために戦われるのは、まことに神であられます。

一、信仰の戦いは、国が敵と味方に分かれて敵対し合う市街戦ではありません。（信仰の戦いではない）そのような戦いは一種の反乱です。そのような戦いは、多くのキリスト者が知っているものです。すなわち良心の不安、そして良いことでもそれを実行できないことに同意してしまう意志の弱さです。キリスト者は自分自身を克服する必要はありません。それは、その人が自分を明け渡すとき主がなされます。そのときその人は自由であり、戦うに強く、神の敵また神の国の敵に打ち勝つのです。しかし私たちが、神に私たちの中で自由に働いていただこうとするやいなや、自分たちが神と戦つていることを見出します。これも確かに戦いなのですが、「信仰の良い戦い」ではありません。

課題

祈り
おお、主イエスさま。主の軍勢のプリンス、英雄、勝利者であられるお方。私のとりでであるあなたにあつて、あなたの権能の御力にあつて強くあることを、私に教えてください。信仰の良い戦いとは何であるかを教えて下さい。また私が必要とするひとつのことあなたから、信仰の至高の導き手であられるあなたからいつも目を離さないでいることです。どのようにそうするのかを私に教えてください。その結果、私においてもこのことが、世に打ち勝つた

二、ガラテヤ人への手紙第五章には、この内面の戦いが言及されています。それはガラテヤのキリスト者たちが、御靈に従つて歩むために、まだ自分自身を完全に御靈に明け渡していかつたからです。ランゲはこう語っています。「その関係は次のことを示しています。肉と神の御靈のこのような戦いは終わりのないものではありません。しかし、ひとつ原理すなわち御靈のみによって導かれるために、キリスト者は自分自身を完全に明け渡すこと、さらに

勝利すなわち私の信仰となりますように。アーメン。

肉に従うことの拒否することが期待されています。「キリスト者は、肉を克服しようとして肉とたたかうべきではありません。それは私たちにはできないことです。私たちがすべきことは、誰に自分たちを服従させるかを選ぶことです。御靈を通して主にあつて戦うために、キリストに信頼して明け渡すことによつて、私たちは勝利を得るための神の力を持つのです。

三、そういうわけですから、新しい生活の始まりについて見てきたように、私たちの日々のそして終日の務めは、（主を）信じることです。信仰からすべての祝福と力が、そして勝利がもたらされるのです。

29 祝福となる

は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。

(マタ5・44、45)

主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。」
(創12・1、2)

神がアブラハムに語られた最初のことばの中に、アブラハムに、また神の子どもである私たちに対して神が語ろうとされた、すべてのことの短い要約を見る事ができます。神が私たちを召し出される目的地を、その目的地に私たちを運んでいく力を、そして力が見出される場所を私たちは見ます。神が私たちを祝福する目的で、その目的地に私たちを見出される目的です。祝福となる。それが、神がアブラハムとすべての信仰者を分離される目的です。神が私たちを祝福されるとき、それは単に私たちを幸せにするためなのではなく、神の祝福をさらに伝えていくためであることを、神は私たちに理解させようとしておられます。

しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父

病人を直し、死人を生き返らせ、らい病人をきよめ、悪霊を追い出しなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい。
(マタ10・8)

神は愛です。それ故に、神は祝福されます。愛は、自分のことを追求しません。神の愛が私たちにもたらされるとき、それは私たちを通して他の人々を探し求めます。

飢えた者に心を配り、悩む者の願いを満足させるなら、あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの暗やみは、真昼のようになる。主は絶えず、あなたを導いて、焼けつくる土地でも、あなたの思いを満たし、あなたの骨を強くする。あなたは、潤された園のようになり、水のかれない源のようになる。
(イザ58・10、11)

愛する者たち。神がこれほどまでに私たちを愛してくれたのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。

(1ヨハ4・11)

新しいキリスト者は、自分が他の人々の祝福となるという、明確な目的を伴う恵みを受け取っていることを理解しなければなりません。主が他の人々のためにあなたに与えてくださったものを、自分のために握っていてはなりません

ん。他の人々のために主に用いていたぐように、明確に完全に自分自身を差し出しましよう。これこそ溢れるばかりの祝福への道です。

ばらまいても、なお富む人があり、正当な支払いを惜しんでも、かえつて乏しくなる者がある。おおらかな人は肥え、人を潤す者は自分も潤される。

(箴11・24、25)

すると、王は彼らに答えて言います。「まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです。」

(マタ25・40)

神は正しい方であつて、あなたがたの行ないを忘れず、あなたがたがこれまで聖徒たちに仕え、また今も仕えて神の御名のために示したあの愛をお忘れにならないのです。

(ヘブ6・10)

この働きのための力は与えられます。「祝福となりなさい。」「わたしはあなたを祝福します。」と主は言われます。私たちは、個人的に聖別され、聖靈と神の平和と力で満たされるべきです。そうしてあなたは、祝福する力を持つのです。

神はまた、それらを祝福して仰せられた。「生めよ。ふえよ。海の水に満ちよ。また鳥は、地にふえよ。」

神はまた、彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」

(創1・22、28)

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしを信じる者は、わたしの行なうわざを行ない、またそれよりもさらに大きなわざを行ないます。わたしが父のもとに行くからです。

(ヨハ14・12)

キリストにあつて、神はあらゆる靈的なもので私たちを祝福しておられます。イエスさまに、これらの祝福で私たちを満たしていただきなさい。そうすれば、私たちは確かに祝福となるでしょう。私たちは、このことを疑つたり恐れたりする必要はありません。

神の祝福はその中に、増し加わるための、広がるための、伝えるためのいのちの力を持つています。祝福と増加とが、いかに相伴つて進むかを聖書の中で見ましょう。

わたしは確かにあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を、空の星、海辺の砂のように数多く増し加えよう。そしてあなたの子孫は、その敵の門を勝ち取るであろう。

(創22・17)

祝福はいつも、他の人々を祝福する力を含んでいます。

「わたしはあなたを祝福します」という全能の神のことばが心にしみこむまで、時間をかけなさい。神が「わたしはあなたを祝福します。」と言ふことができるよう、神を待ち望みなさい。このことを信仰によつてしつかり握つていなさい。すべての探求や思考に勝つて、神があなたにこのことを真実であると証しして下さいます。

神は、あなたがたを、常にすべてのことに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与えることのできる方です。
あなたがたは、あらゆる点で豊かになつて、惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して、神への感謝を生み出すのです。

(2コリ9・8、11)

しかし、目的地に到達するために、あなたは祝福の場所へ、約束の地へ、すなわち、ただ約束に信頼して歩む生活へと、自分自身を委ねなければなりません。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出なさい。(創世記12・1)」と主は言われます。罪と肉の生活から離れ、決別することは神が望まれることです。人にとって最も

も大切なものをささげることは、神の祝福への道です。

イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあつてその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」(ルカ18・29、30)

それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。

(2コリ6・17、18)

「わたしが示す地へ行きなさい。(創世記12・1)」と主は言われます。「古い生活から脱出して新しい生活に入るのだよ。そこでは、わたしだけがあなたのガイドなのだ。」その生活は、神が私をすっかりご自分のものとすることがおできになる生活であり、私が神の約束だけによって歩む信仰の生活です。

キリスト者の方々。神があなたの内に、「わたしはあなたを祝福します。」という神の約束を満たしてくださいますように。どうかあなたの生まれ故郷、あなたの父の家から、罪と肉の生活から、肉とこの世の仲間から離れて出て行きましょう。そうすれば、新しい生活、靈の生活、神とともににある生活に、神があなたを導いてくださるのです。

そこであなたは、神の祝福を受けるようになります。そこであなたの心は、「わたしはあなたを祝福します。」といふ神のみことばに完全な信頼をおくようになります。そこで神は、このみことばをあなたに満たすことがおできになり、他の人々に対して祝福となる祝福と力で、あなたを満たすことがおきになるのです。この世から離れて、神とともに生きましょう。そうすれば、あなたは神のみ声が、「わたしはあなたを祝福します。」「祝福となりなさい。」と力強く語られるのを聞くでしょう。

祈り
私の父よ。彼らを、完全にご自身のために所有されるあなたの民を連れて行かれる約束の地への道を、私に教えてください。あなたに従うために、あなたとだけ会話することができるために、あなたがあなたの祝福で私を満たしてください。さるために、私はすべてのものを捨てます。主よ。あなたのみことば、「わたしはあなたを祝福します。」が神のみことばとして私の心に生きるようにしてくれださい。他の人々のために生きて祝福となるために、私は自分自身を完全におささげいたします。アーメン。

二、祝福となるためには、小さな事から始めましょう。他の人々のために自分自身を与えましょう。他の人々を幸せにするために生きましょう。神の愛が聖靈によつてあなたの内に住んでおられることを信じましょう。あなたの周りにいる人々に対して祝福と喜びになるために、あなた自身をすべて与えましょう。神様が御靈によつて、あなたの内にさらに愛を注いでくださるよう祈りましょう。神があなたを他の人々に対する祝福にしてくださることを信じましょう。

三、神があなたの心を占有されるこの明け渡しは、一人での祈り（静思の時）に時間をかけることが必要です。これはあなたにとつて、あなたの父の家から出ることです。神があなたと話すことがおきになるように、人々からあなた自身を分離することです。

課題
一、神は偉大であり、祝福の唯一の源泉です。私は自分が持っている分だけ、祝福をもたらすことができます。私は

祝福がなくても他の人々のために働くことができます。しかし、実際に祝福となるために、私はこのみことば「わたしはあなたを祝福します。」から始めなければなりません。そのとき、「祝福となりなさい。」というみことばは容易になります。

四、あなたはどう思いますか？アブラハムは、彼が自分自身をすつかり神の導きのもとに置いたことによつて、その後で後悔の念にさいなまれたことなどあつたでしょうか？（もちろんありませんでした）そうであるなら、私たちも同じようにしましよう。

五、アブラハムを信じる子どもへの、すべての約束とすべての命令の源である二つのみことばを知っていますか？

その約束とは、

「わたしはあなたを祝福します。」

その命令とは、

「祝福となりなさい。」

これらの二つのみことばをあなた自身のためにしつかり受け取りましょう。

六、アブラハムに対するこれらの二つのみことばが実行されたことを今理解しましたか？それは、彼の父の家から離れることにおいて、神とともに歩むことにおいて、実行されたのです。

30 個人の働き

あなたの救いの喜びを、私に返し、喜んで仕える靈が、私をささえますように。私は、そむく者たちに、あなたの道を教えましょう。そうすれば、罪人は、あなたのもとに帰りましょう。

(詩51・12、13)

「私は大いに悩んだ。」と言つたときも、私は信じた。

(詩116・10)

しかし、聖靈があながたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。

(使1・8)

すべてのキリスト者は、主の証人として召し出されていました。私は敬虔な歩みによつてだけではなく、個人的な努力によつても主に仕え、主を伝えなければなりません。私たちの話すことばは、他の人々と意思疎通をし、彼らに感化を及ぼす主な手段の一つです。私たちの口をも、主のために用いるものとして献げるようにならない限り、献身は半ばでしかありません。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。」

(ヨハ3・3)

聖書には、主が彼らに何をしてくださつたかを他の人々に語り、彼らの祝福となつた人たちの例で満ちています。

私は、あなたの義を心の中に隠しませんでした。あなたの眞実とあなたの救いを告げました。私は、あなたの恵みと

あなたのまことを大いなる会衆に隠しませんでした。あなたは、主よ。私にあわれみを惜しまないでください。あなたの恵みと、あなたのまことが、絶えず私を見守るようにしてください。

(詩40・10、11)

さあ、神を恐れる者は、みな聞け。神が私のたましいになさつたことを語ろう。

(詩66・16)

この働き（個人の働き）には、想像もつかないほど大きい必要があります。みことばの説教をいつも喜んで聴いてはいても、救いの道を理解していない何千人というキリスト者がいます。主イエスさまは、群衆に説教されただけではなく、個々の人々にその必要に応じて語ることもされました。

つた。

今こそ私は主があらゆる神々にまさつて偉大であることを知りました。実に彼らがこの民に対して不遜であつたといふことにおいても。

(出18・8、11)

この個人的に語りかける働きは、説教者ひとりだけではできません。すべてのキリスト者が、彼と共に働くなければなりません。キリスト者は、主の証人としてこの世にいるのです。主を告白し、主のために働くければ、キリスト者の生活は十分なものとはなり得ません。

主についての証しは、個人的な証しでなければなりません。私たちは、次のように言う勇気を持たなければなりません。「主は私を贖つてくださいました。主は同じ様にあなたをも贖つてくださいます。あなたはこの贖いを受け入れませんか?」さあ、私にその受け取り方をあなたに説明させてください。」

女は、自分の水がめを置いて町へ行き、人々に言った。

「来て、見てください。私のしたこと全部を私に言つた人がいるのです。この方がキリストなのでしょうか。」さて、その町のサマリヤ人のうち多くの者が、「あの方は、私がしたこと全部を私に言つた。」と証言したその女のことばによつてイエスを信じた。

(ヨハ4・28、29、39)

自分に対して、次のように個人的に問い合わせられたら喜ぶ人たちが何百人といいます。「あなたは贖われていますか?」

何があなたを引き留めているのですか?あなたが主のところへ行くために、私がお手伝いできるでしょうか?」両親は、彼らの子供たちと個人的に話し、「あなたは、主イエスさまをもう受け入れているの?」と尋ねるべきです。

日曜学校や平日学校(教会学校)の教師は、神のみことばを教える際、子供たちが本当に救いを受け入れていいかどうかを個人的に尋ねるべきです。そして、個別に彼らに尋ねる機会を探すべきです。人々は、自分たちの友と話さなければなりません。そうです。何はさておいても、この働きがなされるべきです。

このような仕事は、愛の働きでなければなりません。あなたがその人たちをやさしく愛していることを、その人たちが知るべきです。愛の謙遜と柔軟さが、イエスさまに見られるように、あなたにおいても見ることができるようにします。事ごとにイエスさまの愛で満たされるために、自分自身をイエスさまに明け渡しましょう。

私たちが自分の働きをできるのは、この愛を感じることによるのではなく、この愛を信じることによるのです。「主に愛されている人よ。私たちは自分自身を神の愛の中に保ちましょう。そして『疑いを抱く人々をあわれみ、火の中からつかみ出して救い、またある人々を、恐れを感じながらあわれみ(ユダ22、23)』ましょう。」

強さと力の方が愛と忍耐より役立つと、肉は思いがちです。しかし、そうではありません。愛はすべてを成し遂げます。愛は十字架の上で勝利したのです。

「きょう。」と言われている間に、日々互いに励まし合つて、だれも罪に惑わされてかたくにならないようにしなさい。

(ヘブ3・13)

また、互いに勧め合つて、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。

(ヘブ10・24)

この働きは信仰の働きでなければなりません。それは愛によつて働く信仰です。またそれは、主が私たちを用いようと望んでおられると信じる信仰、私たちを用いてくださると信じる信仰です。自分の弱さのために恐れではなりません。主の口として語らなければならなかつた人々に対して、時に応じて神が与えられたすばらしい約束を聖書から学びましょう。

主は彼に仰せられた。「だれが人に口をつけたのか。だれがおしにしたり、耳しいにしたり、あるいは、目を開けたり、盲田にしたりするのか。それはこのわたし、主ではないか。さあ行け。わたしがあなたの口とともにあつて、あなたが言うべき」と教えよう。」(出4・11、12)

失われた人々の救いに用いていただくために、絶えず自身を神に委ねましよう。私たちをこの目的のために贖われたお方は、私たちをこの目的を果たすために祝福してください。たとえ私たちの働きが弱さと恐れの中にあつても、たとえ何の祝福も来ないよう見えて、勇気を出しなさい。主の時に、私たちは刈り取りをするのです。

しかし、あなたがたこそ強くあつてほしいのです。力を落としてはなりません。あなたがたの働きには報いが伴つているからです。

(2歴15・7)

種入れをかかえ、泣きながら出て行く者は、束をかかえ、喜び叫びながら帰つて来る。

(詩126・6)

神の力に対する信仰で、あなたの上にある主の祝福で、祈りが聞かれることの確信で、満たされなさい。「だれでも兄弟が死に至らない罪を犯しているのを見たなら、神に求めなさい。そうすれば神はその人のために、死に至らない罪を犯している人々に、いのちをお与えになります。(ヨハネ5・16)」相手が最も哀れで軽視されているような罪人であつても、あるいはまともではあるが無関心な罪人であつても、勇気を出しましよう。主は、祝福することにおいて力強いお方であつて、祈りをお聞きになります。

これが中心的なポイントなのですが、とりわけ、イエスさまとの交わりの中でこの働きを行いましょう。主のおそばで生活し、もっぱら主のために生き、イエスさまがあなたの全生活において見られるようにしなさい。そうすれば、主があなたの中で語り働くようになるのです。

彼らはベテロとヨハネとの大胆さを見、またふたりが無学な、普通の人であるのを知つて驚いたが、ふたりがイエスとともにいたのだ、ということがわかつて来た。

(使4・13)

主の祝福で満たされ、主の御靈と主の愛で満たされるようにしましょう。そうすれば、あなたが祝福となる以外のことは考えられません。愛と勇気を持ち、まったく謙遜に、魂に質問しましょう。「いかがですか? 主イエスさまをあなたが救い主として持つておられますか?」そうすれば、他の人々を祝福するために生きる人々に對して、約束された豊かな祝福を、主が経験させてくださるのです。新しいキリスト者の方々。イエスさまの証人となりましょう。主の誉れを見つめ、主の誉れを求めて働くために、すべてを主に明け渡す人として生きましよう。

祈り

御父の愛を宣べ伝えることで御父に仕えるために私を贖つてくださった聖なる主イエスさま。この目的のために、私は喜んで自分自身をあなたに差し出します。この目的のために、御父への、あなたへの、また人々への愛で私の心を満たしてください。あなたが成し遂げてくださったように、愛の贖いのわざをなすことがどんなに尊いことであるかをわからせてください。あなたが私の弱さの中に、あなたの力をもつて働いておられるという、私の確信を強めてください。そしてあなたに魂を導くお手伝いをすることを、私の喜びとしてください。アーメン。

課題

一、「私は主のために何ができるでしょうか?」という質問をよく受けます。日曜学校のクラスを引き受けていただけますか? もしかしたらあなたが住んでいる国には、参加できる日曜学校のない子供たちがいるかも知れません。もしかするとあなたの地域には、教会に行かない子どもたちや大人たちがいるかもしれません。イエスさまの名のもとに彼らを集められるかどうか考えてみましょう。それを祈りと信仰の課題にしましよう。これを恐る恐るやつたとしても、働きを始めるることはあなたを強くすることを確信するでしょう。

あるいは、本や文書の配布で何かできるでしょうか? あなたに役立ってきた本を持っているなら、それを六部とか十

二部とかコピーするのです。他の人にその本のことを話してコピーを差し上げるのです。あなたはこの方法ですばらしい奉仕ができます。トラクトでも同様です。あなたはこの方法によって祝福を受けるでしょう。本にはどんなことが書かれているかを伝えることから始めるなら、あなたが他の人に話す上で大きな助けとなるでしょう。

二、しかし、大切なのは個人的に話すことです。自由を感じられないからといって引き下がらないでください。主は主ご自身の時に、あなたに自由を与えてくださいます。

。（福音を）知らないためにいかに多くの人々が失われているかは、実際に信じられないほどです。どうしたら救われるかを、今まで誰も彼らに個人的に明らかにしていないのです。人々は間違った考えに満ちており、すべてを誤解していることに気づいてください。そこであなたは、彼らが自分たちのあるがまままでイエスさまを受け入れるべきであること、イエスさまが自分たちを受け入れてくださつてることを確かに知ることができるということ、そしてこのことこそ、新しい聖いのちの力なのだとということを理解するように語り、魂を助けることを始めましょう。

3 1 伝道の働き

「御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから、終わりの日が来ます。」

それから、イエスは彼らにこう言られた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」そこで、彼らは出て行って、至る所で福音を宣べ伝えた。主は彼らとともに働き、みことばに伴うしるしもつて、みことばを確かなものとされた。

(マル16・15、20)

イエスさまの友はすべて、伝道の友です。健全な靈的生活のあるところには、伝道の目的があります。その理由を考察する時、あなたは伝道することのすばらしさと、この目的を人生の一部として自分のものとすることへの召しを見ることができます。伝道の働きがどれほどすばらしく価値のあるものであるかを、さあ見ていきましょう。

イエスは近づいて来て、彼らにこう言られた。「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる國の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖靈の御名によつてバプテスマを授け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。」(マタ28・18～20)

二、伝道は地上の教会（集会）の第一の目的です。主イエスさまが最後に語られたすべてのみことばはこのことと私たちに教えています。

それから、イエスは彼らにこう言られた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」

(マル16・15)

その名によつて、罪の赦しを得させる悔い改めが、エルサレムから始まってあらゆる國の人々に宣べ伝えられる。

(ルカ24・47)

一、伝道はイエスさまが天の御座からくだつてこられた目的です。

失われた人々は、御父からイエス様にお与えになられた相続財産です。悪魔の力は、失われた人々の中において確立されています。イエスさまは、征服者としてご自身を実証しなければなりませんでした。主の栄光、主の王国の到来とその表明とは、伝道にかかっているのです。

あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

(ヨハ17・18)

主は頭（かしら）であられ、「ご自身をそのからだ（教会）すなわち肢体に依存するものとされました。主はその肢体を通してだけ、ご自身の働きをすることができるようになります。

そこで、目が手に向かつて、「私はあなたを必要としない。」と言つことはできないし、頭が足に向かつて、「私はあなたを必要としない。」と言つともできません。

(1コリ12・21)

キリストの肢体として、教会の一員として、この目標に達成するための働きに加わるため、私は自分自身をささげるべきではないでしょうか？

三、聖靈が与えられたのはこの働きのためでした。このことを、聖靈の約束の中に、ペテロとバルナバとサウロに与えられた聖靈の導きに見てみましよう。

すると、主は私に、「行きなさい。わたしはあなたを遠く、異邦人に遣わす。」と言われました。

(使22・21)

彼らが主を礼拝し、断食をしていると、聖靈が、「バルナバとサウロをわたしのために聖別して、わたしが召した任務につかせなさい。」と言われた。ふたりは聖靈に遣わされて、セルキヤに下り、そこから船でキプロスに渡った。

(使13・2、4)

そして御靈は私に、ためらわずにその人たちといっしょに行くように、と言われました。そこで、この六人の兄弟たちも私に同行して、私たちはその人の家にはいって行きました。彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保つて、常に主にとどまっているようにと励ました。彼はりっぱな人物で、聖靈と信仰に満ちている人であった。こうして、大ぜいの人が主に導かれた。

(使11・12、23、24)

しかし、聖靈があながたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。

(使1・8)

四、伝道は教会（集会）に祝福をもたらします。伝道は、信頼と自己否定の英雄的な行為へと奮起させます。伝道は、主の驚くべき御力の最も輝かしい実例を提供してきました。神の驚くべきみわざは、愛と祈りでそれを待ち望む

人々に、罪人の回心について天のよろこびを与えます。神のご計画を理解し、その実現に関わることは心を強くします。伝道の働きは、教会における神のいのちのしるしであつて、さらについのちをもたらします。

そこに着くと、教会の人々を集め、神が彼らとともにいて行なわれたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださつたことを報告した。 （使14・27）

兄弟たち。私はあなたがたに、ぜひこの奥義を知つていていただきたい。それは、あなたがたが自分で自分を賢いと思つことがないようにするためです。その奥義とは、イスラエル人の中一部がかたくなになつたのは異邦人の完成のなる時までであり……

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。

（ロマ11・25、33）

また、「うも言われています。「異邦人よ。主の民とともに喜べ。」

（ロマ15・10）

五、それは世界にとつて何という祝福でしよう。ヨーロッパにおいて異教徒であった私たちの父祖たちのところに宣教師たちがきてくれなかつたとしたら、私たちはどうなつていたことでしようか？いくつかの国々で、伝道の働きが輝かしい勝利を勝ち得ていなかつたとしたらどうなつてい

たでしようか？伝道の働きが無ければ、失われている何百万人の人々に、何の助けがあるでしようか？

六、伝道の働きを愛することで、あなたがたの魂に祝福があるでしよう。

飢えた者にはあなたのパンを分け与え、家のない貧しい人々を家に入れ、裸の人を見て、これに着せ、あなたの肉親の世話をすることではないか。そのとき、暁のようにあなたの光がさしいで、あなたの傷はすみやかにいやされる。あなたの義はあなたの前に進み、主の栄光が、あなたのしんがりとなられる。 （イザ58・7、8）

あなたは信仰の訓練を受けるでしよう。伝道は信仰のためであつて、そこでは忍耐が試され、人間的な方法が捨て去られます。私たちは、神とみことばに堅く結びつくことを学ばなければなりません。

愛が目覚めさせられるでしよう。あなたはあなた自身から、あなたの小さなサークルから出て行くこと、そして開かれた大きい心で、私たちの主であり王であられるお方が関心を持つておられることの中に生きることを学ぶでしよう。私たちは本当に小さな愛しか持つていないにも関わらず、さらに多くの愛を受け取るでしよう。

私たちは祈りに引き込まれていきます。執り成し手としてあなたが召されていくこととその力があなたにより明らかになり、それとともに、神の国のためにこのように同労者

として働くことの祝福が明らかになるのです。私たち自身の安樂と休息を放棄して、失われた人々のために、悪魔に對して愛によつて祈りの戦いを戦うことは、失われた者を探し出すために来てくださった主に対する最高の服従であること私たちは知るでしょう。

新しいキリスト者の友よ。伝道は想像以上にすばらしく、かつ神聖な働きです。そこには私たちが知つてゐる以上の祝福があります。私たちの新しいのちは、私たちが今理解している以上に、伝道に依存しています。私たちの心の、そうです、私たちの心の広い場所を伝道に与えるために、みことばに従つて自分自身を明け渡してください。主ご自身が、なお一層私たちを教え祝福してくださるでしょう。

そして、もし私たちが、主のみわざとして、伝道に對する愛を増し加えるならば、次の点に心を留めてください。

印刷物や本を通して、世の中がどんな状況にありどんな必要があるのか、主の祝福によつて既に何がなされたのか、いまなされているみわざは何かを知ることに努めてください。

他の人たちとこの目的について話しましょう。多分近所の人たちと、小さな伝道のための集まりを設けることになるでしょう。多分祈り会の一部、例えば月一回を祈り会から切り離して、伝道のための交わり会にすることもできるでしょう。

このことのためにも、個人的に祈りましょう。個人の祈りにおいて、御国が（人々のもとに）来るようとの祈りが確かな位置を占めるようにしましょう。みことばの約束、特にイザヤ書において書かれている、失われた人々についての祈りの材料に従いましょう。

「子を産まない不妊の女よ。喜び歌え。産みの苦しみを知らない女よ。喜びの歌声をあげて叫べ。夫に捨てられた女の子どもは、夫のある女の子どもよりも多いからだ。」と主は仰せられる。

あなたは右と左にふえ広がり、あなたの子孫は、國々を所有し、荒れ果てた町々を人の住む所とするからだ。

（イザ54・1、3）

そのとき、國々はあなたの義を見、すべての王があなたの栄光を見る。あなたは、主の口が名づける新しい名で呼ばれよう。

（イザ62・2）

伝道のために獻げなさい。求められた時にだけでなく、事務的に割くことができるものをというだけではなく、あなたが所有しているものや収入の一部を、この目的のために取り分けなさい。

主のはたらきに熱心でありなさい。あなたの近隣で伝道が行われているなら、それに対しても協力者であることを示しましょう。その働きに欠点があるなら（完全な働きなどどこにあるでしょう？）その欠点に不満をいうのではなく、その目的の本質を見るようにし、主の命令に従う

ことに努め、祈りと援助の手を与えたさい。イエス様の友は伝道の友です。伝道に対する愛は、新しいのちの不可欠の要素です。

祈り

神の御子のイエスさま。あなたは弟子たちに息（聖靈）を吹きかけて言わされました。「聖靈を受けなさい。」そして付け加えられました。「父がわたしを遺わしたように、わたくしもあなたがたを遣わします。」

主よ。私はここにおります。私をお遣わしになつてください。あなたの聖靈をこの私にも吹きかけ、あなたの御国のために生きる者としてください。アーメン。

課題

一、「知られていないことは愛されていないことになる」という言葉は伝道の働きについて真理です。神がある地方で働くことを驚きの念をもつて知る人は、伝道のわざが成し遂げられたことに対して、神に祈りと感謝をささげます。そして、伝道が本当に神ご自身のご目的であるという信仰を強められるのです。

書物の中で、伝道への関心を目覚めさせる助けとなるのは伝道者の伝記です。伝道に関する書物は、たいてい教会の書庫で見つけられます。

二、伝道者の動機は、信仰の働きであることを忘れてはなりません。神の約束に、神の力に信頼することが求められ

ます。愛、イエス様の愛が必要であり、その愛によつて心は主の誉れを求める願いで、また失われた人々の安全を希求する愛で満たされるのです。これは、この世が受け入れることができない神の御靈の働きです。つまりこの世は、教会（集会）が最高度の繁栄を伴つて前進するときだけ、伝道の働きに賛同することができるのです。

三、いかなる伝道の友も、伝道の働きがゆっくりとしか進まないときでも勇気を失わないようにならしむ。洗礼を受けたすべての人が必ずしも改心していなくとも、改心者の中にさえまだ強情さなどが見られたとしても、何人かが信仰を告白した後で信仰を後退させたとしても、私たち自身の教会（集会）は完全からほど遠いことを忘れてはなりません。ヨーロッパの父祖たちの間で丸々一世紀間が、キリスト信仰の紹介に費やされたのです。不信仰の人々から、一度にあまり多くを期待しすぎることなく、愛と忍耐と堅い信仰によって、祈り、働き、神の祝福を期待します。

32 光と喜び

幸いなことよ、喜びの叫びを知る民は。主よ。彼らは、あなたの御顔の光の中を歩みます。彼らは、あなたの御名をいつも喜び、あなたの義によつて、高く上げられます。

(詩89・15、16)

光は、正しい者のために、種のよつて蒔かれている。喜びは、心の直ぐな人のために。

(詩97・11)

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。

(ヨハ8・12)

あなたがたにも、今は悲しみがあるが、わたしはもう一度あなたがたに会います。そうすれば、あなたがたの心は喜びに満たされます。そして、その喜びをあなたがたから奪い去る者はありません。

(ヨハ16・22)

悲しんでいるようでも、いつも喜んでいます。

(エリ6・10)

父親は、自分の子どもたちが喜んでいるのをいつも見たいと切望します。父親は、子どもたちを幸せにできることなら何でもします。同様に、神も、神の子どもたちが主の御前を心から喜んで歩むことを望んでおられます。神は、神

の子どもたちに喜びを約束されました。神はそれを与えてくださいます。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しております、いま見てはいられないけれども信じております、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどります。

(1ペテ1・8)

神は喜ぶことを命じられました。私たちはそれを受け取つて、いつもその中を歩まなければなりません。

主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを、全世界に知らせよ。シオンに住む者。大声をあげて、喜び歌え。イスラエルの聖なる方は、あなたのにおられる、大いなる方。

(イザ12・5、6)

いつも主にあつて喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。

(エリ4・4)

このことの理由を見出すのは難しくありません。喜びは、何かが私を本当に満たし、それが私にとって大きな価値を持っていることのしるしです。とりわけ私が持つてている喜びは、他の人々への推薦状です。神にある喜びは、私が神が恐ろしくて仕えているのではなく、守られるためでもなく、神が私の救いだからなのだとという最も強い証拠です。喜びは真理であることと、服従に値するものであることの

しるしであり、神のみこころを喜んでいるかどうかを表しています。

あなたがすべてのものに豊かになつても、あなたの神、主に、心から喜び楽しんで仕えようとするしないので、

(申28・47)

私は、あなたを喜び、誇ります。いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。

(詩9・2)

そういうわけで、神を喜ぶことが、神に受け入れられ、キリスト者自身を強め、そして周りにいるすべての人々に対して考えうる最も雄弁な神についての証しとなるのです。

主を喜ぶ」とは、あなたがたの力であるから。

(ネヘ8・10別訳)

神に向かつて歌い、御名をほめ歌え。雲に乗つて来られる方のために道を備えよ。その御名は、主。その御前で、「おどりして喜べ。

(詩68・4)

聖書の中では、光と喜びはしばしば互いに関連していくます。

ユダヤ人にとって、それは光と、喜びと、楽しみと、栄誉であった。

(エス8・16)

あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかけることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。

(イザ60・20)

自然界においてもそうです。朝の喜ばしい光が、小鳥たちを目覚めさせて歌をうたわせ、闇の中で朝を待ちわびていた見張り番を喜ばせます。キリスト者に喜びを与えるのは、神の御顔の光です。主との交わりの中で、私たちはいつも喜ぶことができ、喜ぶのであり、また幸せです。御父の愛は、神の子どもたちの上に太陽のように輝いています。

起きよ。光を放て。あなたの光が来て、主の栄光があなたの上に輝いているからだ。
あなたの太陽はもう沈まず、あなたの月はかけることがない。主があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。

(イザ60・1、20)

私たちには、私たちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛のうちにいる者は神のうちにおり、神もその人のうちにおられます。

(1ヨハ4・16)

闇が魂の上にやつて来るのは、いつも二つのもの、罪と不信仰のいずれかを通してです。罪は闇であり、闇を作り出します。そして不信頑も闇を作ります。なぜなら不信頑は

私たちを、ただお一人光であられる神からそらさせるからです。

兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つましく」とあります。」

時々こう尋ねられます。「キリスト者はいつでも光の中を歩むことができますか？」私たちの主の答えは明快です。

「わたしに従う者は、決してやみの中を歩む」とがない。
(ヨハネ8・12)」イエスさまから私たち自身の道にそれることは罪であり、それは闇を作り出します。しかし、私たちが罪を告白し血潮で洗われた瞬間に、私たちは再び光の中にいます。

立て。民をきよめよ。そして言え。あなたがたは、あすのために身をきよめなさい。イスラエルの神、主がこう仰せられるからだ。

「イスラエルよ。あなたのうちに、聖絶のものがある。あなたがたがその聖絶のものを、あなたがたのうちから除き去るまで、敵の前に立つ」とはできない。」

(エシーア・13)

飢えた者に心を配り、惱む者の願いを満足させるなら、あなたの光は、やみの中に輝き上り、あなたの暗やみは、眞昼のようになる。

(イザ58・10)

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。明らかにされたものはみな、光だからです。それで、「う言われています。「眠っている人よ。目をさせ。死者の中から起き上がり。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」

(ペテロ5・8、14)

あるいは、闇をもたらすものは不信仰です。私たちは自身と自分の力を頼みにします。私たちは自分自身の感覚的な安樂さ、自分自身の働きを追求します。そして、すべて闇となるのです。私たちがイエスさまに、イエス様の十分さに、イエスさまの中にある私たちの必要なための完全な備えに向くとすぐに、すべては光となるのです。主は言われます。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩む」となく、いのちの光を持つのです。(ヨハ8・12)」私たちが信じている限り、私たちは光と喜びを持つのです。

あなたがたに光がある間に、光の子どもとなるために、光を信じなさい。

(ヨハ12・36)

どうか、望みの神が、あなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によつて望みにあふれさせてくださいますように。」

(ロマ15・13)

主のみこころに従つて歩もうとするキリスト者は、主のみことばが何と言つてゐるかを聞きましょう。「最後に、私の兄弟たち。主にあつて喜びなさい。(ペリ3・1)」いつも主にあつてよろこびなさい。もう一度言ひます。喜びなさい。(ペリピ4・4)」

主イエスさまの中に、ことばに尽くすことのできない栄えに満ちた喜び（1ペテロ1・8）があります。主を信じること、このことにおいて喜びましょう。信仰の生活を生きる、その生活は救いとすばらしい喜びです。二心なくイエスさまに従うために献げられた心は、主と主の愛を信じる信仰によつて生き、光と喜びを持つでしよう。だから、ただ信じましょう。喜びを探し求めてはなりません。このようにしては、それを見出すことはないでしよう。なぜなら、あなたが感情を探し求めているからです。そうではなく、イエスさまを求め、イエスさまに従い、イエスさまを信じるのです。そうすれば、喜びがあなたに伴つてくるでしょう。

「見てはいなけれども信じており、ことばに恩くす」とのできない、榮えに満ちた喜びにおどつています。（1ペテロ1・8）」

祈り
主イエスさま。あなたは世の光です。近づくことのできない光の完全な現れであられます。あなたにおいて、私たちは神の光を見ます。あなたの御顔から、神の愛と榮光の知識の光が、私たちの上に注がれています。そして、あなたは私たちのものであり、私たちの光、私たちの救いであります。私たちがあなたとともにあり、決して闇の中を歩むことがないように、より堅く信頼することを私たちに教えてください。喜びを、あなたが私たちにとってすべてであり、あなたが私たちにさせようとされるすべてのことを

行う私たちの力であられるとの証明としてください。アーメン。

課題

一、私が何かについて持つ喜びは、私の目に映るものの価値を表します。ある人に対しても持つ喜びは、その人に對して私の持つ楽しみの尺度です。私が仕事に対して持つ喜びは、それに対する楽しみの尺度です。神と神への奉仕に持つ喜びは、健全な靈的生活の最も確かなしるしの一つです。

二、喜びは、次の事柄によつて妨げられてしまいます。私たちが神ご自身を、神の愛を、神に仕えることの祝福を正しく理解しない無知によつて。私たちが依然として、自身の力や感情の中に何かを探し求める「不信仰」によつて。私たちが進んですべてをイエスさまに差し出し、放棄することをしない二心によつて。

三、次のことばを理解しましょう。

「喜びそのものを探し求める人は、それを見出すことはない。主を求め主のみこころを探し求める人は、求めてもいられないほどの喜びを見出す。」

これについて考えてみましょう。喜びを感覺的なものとして探し求める人は自分自身を追求しているのです。その人は、喜びを見出すことはありません。主と主のみこころに生きて自分のことを忘れる人は、主にあつて喜ぶことを教

えられるのです。私たちが喜ぶのを喜ばれる神、神はそういうお方です。神を求めてください。そうすればあなたは喜びを持つのです。そのときあなたは、信仰によつて単純に喜びを受け取り楽しむのです。

四、神がどのようなお方であり、何をなしておられるかについて豊かに感謝すること、また、神が語つておられることと、しようとしておられることを深く信頼すること、これらは喜びに留まる秘訣です。

五、「**目**の光は心を喜ばせる。(箴15・30)」神は、神の子どもたちが闇の中を歩むことを意図してはおられません。悪魔は暗闇の君です。神は光です。キリストは世の光です。私たちは光の子どもです。光の中を歩みましょう。約束を信じましょう。「**主**があなたの永遠の光となり、**主**あなたの太陽はもう沈まず、**主**があなたの永遠の光となり、あなたの嘆き悲しむ日が終わるからである。(イザヤ60・19、20)」

33 懲らしめ

主よ。なんと幸いなことでしょう。あなたに、戒められ、あなたのみおしえを教えられる、その人は、わざわいの日に、あなたがその人に平安を賜るからです。

(詩94・12、13)

苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。しかし今は、あなたの「ことば」を守ります。
苦しみに会ったことは、私にとつてしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。

(詩119・67、71)

靈の父は、私たちの益のため、私たちを「自分の聖さにあずからせよう」として、懲らしめるのです。

(ヘブル12・10)

私の兄弟たち、さあさまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。信仰がためされると忍耐が生じるという」とを、あなたがたは知っているからです。

(ヤコブ1・2、3)

すべてのキリスト者は、いずれ、試練の学校に入らなければなりません。聖書が私たちに教えていることは、経験によって確かなものとされます。そして聖書はさらに、神がこの試みの学校に導かれたなら、それを喜びなさいと教えます。

試みそれ 자체が祝福をもたらすのではありません。天的な祝福の一部なのです。

彼らはわたしに向かつて心から叫ばず、ただ、床の上で泣きわめく。彼らは、穀物と新しいぶどう酒のために集まつて来るが、わたしからは離れ去る。わたしが訓戒し、わたしが彼らの腕を強くしたのに、彼らはわたしに対して悪事をたくらむ。

(ホセア7・14、15)

地面が雨で潤され、鍬で耕されても、種がそこに蒔かれなければ何にもなりません。ちょうどそのように、試練を通つても、それからほどんど祝福を受けることの無い神の子どもたちがいます。一時は心が柔らかにされますがあれから永続的な祝福を得ることがありません。彼らは、御父が試練の学校において、彼らのために計画を持っておられるということを理解しません。

よい学校には四つのことが必要です。それは、明確な目的、よい教科書、有能な教師、意欲的な生徒です。

一、試練の目的を明確にしましよう。聖であることは御父の最高の栄光です。それは信者にとつても同じです。御父は、「私たちの益のため、私たちを「自分の聖さにあずからせよう」として（ヘブル12・10）」懲らしめられます。

しかし、私たちがさばかれるのは、主によつて懲らしめられるのであって、それは、私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。（1コリ11・32）

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえつて悲しく思われるものですが、後になると、「これによつて訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。

（ヘブ12・11）

試練の中で、信者はしばしばそこから救われることだけを求めます。特別な懲らしめの中で、平穏と満足を探し求めます。これがまさに始まりです。しかし、御父は何か他のこと、何かもつと高いものを望んでおられるのです。御父は、生涯を通して信者を聖くしようとしておられます。ヨブは「主の御名はほむべきかな。」（ヨブ1・21）と言いましたが、しかしそれは彼の学課の始まりでした。神は、彼をさらに教えなければなりませんでした。神が私たちを試みられる点においてだけでなく、私たちの意思があらゆることにおいて神の聖なるみこころと一致することを、神は望んでおられます。神は、神の聖靈で、神の聖さで、私たちを満たそうとされます。これが神の目的です。これが試練の学校において、あなたの目的でもあるべきです。

二、試練のときこそ、神のみことばを私たちの読むべき書としましよう。私たちの試練のときにその痛みの中で、神

がみことばを通して私たちをどのように教えようとしておられるかを見るのです。みことばは私たちに、御父がなぜ私たちを懲らしめられるのか、御父が試練の中にあつて私たちをどんなに深く愛しておられるか、そして御父の慰めの約束がいかに豊かであるのか私たちに明らかにするでしょう。試みは、御父の約束に新しい栄光をもたらします。懲らしめのとき、強められるためにみことばのもとにいきましょう。

どうか、あなたのしもべへのみことばを思い出してください。あなたは私がそれを待ち望むようになさいました。これこそ悩みのときの私の慰め。まことに、みことばは私を生かします。
もしかしたらのみおしえが私の喜びでなかつたら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。あなたのみことばによつて、私の歩みを確かにし、どんな罪にも私を支配させないでください。（詩119・49、50、92、143）

三、イエスさまを私たちの教師としましよう。主ご自身は、苦難によつて聖別されました。主が完全な服従を学ばれたのは、苦難においてでした。主は驚くばかりに思いやりの心を持っておられます。主との交わりの中に時を過ごしましよう。他の人々から慰めを受けようとしてはなりません。イエスさまに、あなたを教えるための機会を提供してください。ひとりになつて主との交わりを持つてください。

神である主の靈が、わたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやるために、わたしを遣わされた。捕われ人には解放を、囚人には釈放を告げ、主の恵みの年と、われわれの神の復讐の日を告げ、すべての悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに贊美の外套を着けさせるためである。彼らは、義の桺の木、栄光を現わす主の植木と呼ばれよう。

(イザ 61・1～3)

御父は、私たちを聖別するために、みことば、聖靈、主イエスさまを、私たちの聖別として与えてくださいました。苦しみと懲らしめは、あなたをみことばに、イエスさまのもとに連れて来て、あなたが神の聖さに与るよう意図されています。慰めが自ずからやってくるのは、イエスさまとの交わりにおいてです。

私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。神は、どのようないいのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。

(2コリ1・3、4)

四、喜んで行う生徒になりましょう。自分が無知であることを認めましょう。自分は神のみこころを理解していると考えてはなりません。あなたが苦しみの中で学ぶべき学科

を、主が私たちに教えてくださるように求め、期待します。柔軟な人に対しては、教えと知恵が与えられるという約束があります。耳を開き、心を静めて神に向かうことを求めましょう。私たちを試練の学校に置かれたのは御父であることを知つてください。御父が語られることに耳を傾けて、御父があなたに教えようとしておられることを学ぶために、よろこんで自分自身を明け渡しましょう。このように応答することで、御父は私たちを大いに祝福されるでしょう。

主は貧しい者を公義に導き、貧しい者に「自身の道を教えられる。

(詩25・9)

「主よ。なんと幸いな」とでしょう。あなたに、戒められ、あなたのみおしえを教えられる、その人は。(詩篇94・12)」「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい。・・・その忍耐を完全に勵かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところがない、成長を遂げた、完全な者となります。(ヤコ1・2、4)」試みのときは祝福の時、御父と深く交わり、御父の聖さに与らせていただく時と考えましょう。そしてあなたもまた喜ばしく言うでしょう。「苦しみに会ったことは、私にとつてしまわせでした。(詩篇119・71)」

祈り

父なる神さま。この人生の暗い数々の試練を照らす、あなたのみことばの輝かしい光のゆえに、私はあなたに対してもどのような感謝を表したらよいのでしょうか。あなたは私を教え、あなたの聖さに与る者としてくださいます。あなたは、私に聖さをもたらすためにあなたの愛する御子が苦難と死を受けられることを、大きすぎる代償だとはお考えになられませんでした。ですから、あなたの聖さに与るために、あなたの懲らしめを私が喜んで耐え忍ばないことなどあるでしょうか？いいえ、お父様。あなたの尊いみわざのゆえにあなたに感謝いたします。ただ私の内にあなたの助言を果たしてくださいますように。アーメン。

三、神のみこころは、神ご自身がそうあられるのと同様に完全です。それに対して自分自身を明け渡すことを恐れてはなりません。神のみこころは無条件に良いものであると考えて、損失を被る人はいません。

四、神のみこころを知り崇めること、自分のすべてをそれと一つにすること、これが聖別です。

課題

一、懲らしめにおいて、第一に必要なことは、これは神のみこころであるという考えに、私たちが支配されるべきだということです。試みは、私たち自身の愚かさや強情さからやつてくるかも知れませんが、私たちがその悩みを受けることが神のみこころであることを、私たちは認めなければなりません。私たちはこのことを、ヨセフと主イエスさまにおいて、はつきりと見ます。それが神のみこころであると進んで認める以外には、何ものも私たちに安息を与えません。

二、第二に必要な考えはこうです。神のみこころは試練であるばかりでなく、その中に慰め、力、祝福が与えられま

すます。懲らしめ 자체の中に神のみこころを認める人は、神のみこころに添えられたものをも、見たり経験したりする途上にあるのです。

五、試練に際して、人に慰めを求めてはなりません。彼らとつき合い過ぎてはなりません。むしろ、神とみことばに接するように心がけてください。

試練の目的は、私たちが神に向き直り、神の完全なみこころに私たちの意志を一致させるための時間を神に与えるために、私たちを地上的なものから引き離すことにあります。

34 祈り

あなたは、祈るときには自分の奥まつた部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。（マタ6・6）

私たちの靈的な生活の成長は、大いに祈りにかかるべきです。多く祈るか少ししか祈らないか、喜んで祈るか義務として祈るか、神のみことばによつて祈るか、自分自身の気分によつて祈るかに応じて、人生は盛んになるか衰退するかのどちらかです。先に引用したイエスさまのみことばの中に、真の祈りについての基本的な考えが述べられています。神とだけ……これが第一に考へることです。戸は閉まつていなければなりません。この世と人は外にいるのです。なぜなら私は、神と妨げの入らない交わりを持つべきだからです。旧約の時代には、神がそのしもべに会われるときは、彼らを一人だけで召されました。

アブラハムはまだ、主の前に立つていた。アブラハムは近づいて申し上げた。（創18・22、23）

主は人が自分の友と語るよう、顔と顔とを合わせてモーセに語られた。（出33・11）

第一の考えを祈りに適用しましょう。神と私はこの部屋で共にいます。神のみそば近くにいるというあなたの確信に応じて、あなたの祈りが力強いものとなります。

御父のご臨在の中で……これが第二に考へることです。あなたは奥まつた部屋へ入るのです。なぜなら、そこでは主が愛をもつてあなたを待つていてくださるからです。あなたが、自分自身の冷たさや暗さを感じているとしても、自分が祈れるかどうか疑つていたとしても、行きましょう。なぜなら、御父がそこにおられ、そこであなたのこと顧みておられるのですから。自分自身を主の御目の光の下におきましょう。御父の優しさ、父親らしい愛を信じましょう。この信頼から祈りが生まれるでしょう。

あなたは、祈るときには自分の奥まつた部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。だから、彼らのまねをしてはいけません。あなた

がたの父なる神は、あなたがたがお願ひする先に、あなたがたに必要なものを知つておられるからです。

(マタ6・6～8)

答えを期待して……」これがイエスさまのみことばにある第三の点です。「あなたの父はあなたに公然と報いてくださいます。(マタイ6・6) KJV訳」主イエスさまが祈りが答えられることの確かさを、これほど明確に語られたことは他にありません。数々の約束を振り返り返りましょう。だからあなたがたに言うのです。祈つて求めるものは何でも、すでに受けたと信じなさい。そうすれば、そのとおりになります。

(マル11・24)

あなたがたがわたしにとどまり、わたしのことばがあなたがたにとどまるなら、何でもあなたがたのほしいものを求めなさい。そうすれば、あなたがたのためにそれがかなえられます。

あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。それは、あなたがたが行つて実を結び、そのあなたがたの実が残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によつて父に求めるものは何でも、父があなたがたにお与えになるためです。

(ヨハ15・7、16)

聖徒たちの祈りの書である詩篇の中で、神がいつも、祈りを聞かれ、答えを与えてくださる神と呼ばれているかを観察してください。

知れ。主は、「自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる。」(詩4・3)

彼らが主を仰ぎ見ると、彼らは輝いた。「彼らの顔をはずかしめないでください。」

主の使いは主を恐れる者の回りに陣を張り、彼らを助け出される。

彼らが叫ぶと、主は聞いてくださる。そして、彼らをそのままの苦しみから救い出される。主は心の打ち碎かれた者の近くにおられ、たましいの碎かれた者を救われる。

(詩34・5、7、17、18)

あなたの中には、祈りが答えられるのを妨げる多くのものがあるかも知れません。祈りの答えが遅れるのは、とても幸いな訓練です。それによつて私たちは、果たして間違つた祈りをしていいかどうか、また私たちの生活が私たちの祈りと本当に調和しているかどうかを自省するようになれます。それは、より純粹な信仰の実践へと促します。

だから、イスラエル人は敵の前に立つことができず、敵に背を見せたのだ。彼らが聖絶のものとなつたからである。あなたがたのうちから、その聖絶のものを一掃してしまわ

ないなら、わたしはもはやあなたがたとともににはいない。

(ヨシフ・12)

寄るべのない者の叫びに耳を閉じる者は、自分が呼ぶときに答えられない。

(箴21・13)

それで、彼らが主に叫んでも、主は彼らに答えない。その時、主は彼らから顔を隠される。彼らの行ないが悪いからだ。

(ミカ3・4)

ただし、少しも疑わずに、信じて願いなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。

(ヤコ1・6)

願つても受けられるのは、自分の快樂のために使おうとして、悪い動機で願うからです。

(ヤコ4・3)

ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働く、大きな力があります。

(ヤコ5・16)

それは、より親密で継続的な神との交わりに導きます。祈りが答えられることを確信することは、力強い祈りの秘訣です。私たちについてはこのことを、いつも祈りの中心的なこととしましょう。あなたが祈るとき、祈りの途中で立ち止まつて尋ねましよう。「祈り求めていることを私は受け取っているのだ、と私は信じているだろうか?」と。あ

なたの信仰に、答えを与えられたものとして受け取らせ、しっかりと保持させましょう。これはあなたの信仰に応じて起こるのです。

そこで、イエスは彼らの目にさわって、「あなたがたの信仰のとおりになれ。」と言われた。

(マタ9・29)

また求めるものは何でも神からいただくことができます。なぜなら、私たちが神の命令を守り、神に喜ばれることを行なつていているからです。

(1ヨハ3・22)

何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださる」と、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願つたその事は、すでにかなえられたと知るのです。

(1ヨハ5・14、15)

(主に) 愛されている新しい信仰者のみなさん。あなたが誠実でなければならないひとつのことがあるとしたら、それは神との個人的な交わりです。あなたのいのちは、キリストとともに神のうちに隠されています。あなたは、毎日祈りによって神に求め、信仰によってあなたがその日に必要なものを受け取ります。御父ならびに主イエスさまとの個人的な交わりは、日々新たにされ強められなければなりません。神は私たちの救いであります。私たちの力です。キリストは、私たちのいのちであり聖さです。私たちの祝福

は、生ける神との個人的な交わりの中にだけ見出されるのです。

。

して、私が信仰を持つて求めるものを、私は受け取るのだ、という強い確信を私の中に堅固なものとしてください。アーメン。

キリスト者の方々。多く祈りましょう。絶えず祈りましょう。途切れることなく祈りましょう。祈りたくないときは、そのときこそ奥まつた部屋に入るのです。何も御父のもとに携えてくるものを持たない人として、主の前に出るのです。父の愛を信じる信仰によつて、主の前に自らを置きましょう。御父のもとに来てその御前にとどまることは、すでに祈りであつて父が認めてくださいます。神の前に出ることは、たとえそれが消極的であつても、いつも祝福をもたらすことを確信してください。御父は祈りを聞かれるだけではありません。御父は、隠れた所で見ておられ、公然とそれに報いてくださいます。

課題

一、祈りにおいて最も本質的な要素は信仰です。救いの全体、新しいのちの全体は、信仰によります。ですから祈りにも依存しています。あまりにも多くの祈りが何ともならないません。なぜなら、そこにはほとんど信仰がないからです。私が祈る前、祈つている間、そして祈つた後で、私は尋ねなければなりません。『私は果たして信頼して祈つていいだらうか』と。私は言わなければなりません。『私は心の底から信じます』と。

お父様。あなたは、あなたのみことばの中で、信仰の祈りは聞いてくださるとはつきりと約束しておられます。祈りの御靈を私に与え、どうしたらそのような祈りを献げることができるとができるかを知らせてください。キリストにあつて私の罪を消し去つてくださる、あなたの驚くべき父の愛を私に現してください。そうすれば、(あなたを信じるという)方向にあるすべての妨げは取り去られます。そしてわたしにある御靈の交わりを現してください。そうすれば、私の無知や弱さが私から祝福を奪うことはありません。あなたと親しい交わりの中で祈ることを私に教えてください。そ

二、この信仰に達するために、私たちは祈りに時間を費やすければなりません。その時間とは、御前に自分自身を静まらせ、信仰をもつてとどまらせ、神のご臨在の中で新しくされるための時間であり、私たちの魂が神との親しい交わりの中で聖別される時間であり、聖靈が私たちに、約束のみことばをしつかり握つて信仰を持って用いるように教えてくださる時間です。

私たちは神との時間を持たないでは、世の知識に、物を得ることに、食物に、あるいは友らとの交わりに向かうことにはしません。神との時間を取らないなら、私たちはどう祈つたらよいか、祈りの力や祝福をどのようにしたら楽しむ

ことができるかについて、学ぶことができると期待すべきではありません。

三、そして次に、毎日時間が必要なだけではなく、毎日毎日忍耐が必要です。私たちの祈りは、みこころに沿つたものであるなら聞かれるという確信のもとに、私たちが御父に受け入れられており、私たちの祈りには力があるという確信において成長するには時間が必要です。祈りは神との会話であり交わりです。祈りにおいて、神は私たちの中で働かれる時と機会とを持たれ、また祈りにおいて、私たちの魂は自分自身の意志と力に死に、神と結び合わされ一つにされるのです。

四、粘り強く祈ることを勇気づけるために、次の例が助けになるでしょう。ジョージ・ミュラーは次のように語りました。一八四四年に五人の人が彼の心にとまっています。それで、彼らの回心のために祈り始めました。最初の人が回心するまでに十八ヶ月が過ぎました。彼はさらに五年間祈りました。そのとき二人目の人が回心しました。十二年半経つてまたもう一人が回心しました。そして今、彼はすでに四十年間、一日も休むことなく、残る二人のために祈り続けています。そして、今なお彼らは回心していません。それでもかかわらず、彼はこの二人も祈りが答えられて自分に与えられることを確信しているのです。これこそ確信ある祈りの生活です。

35 祈り会

「の人たちは、婦人たちやイエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たちとともに、みな心を合わせ、祈りに専念していました。」

(使1・14)

「まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。」

(マタ18・19、20)

イエスさまは、私たちに、奥まつた部屋に入り、密かに人に見られないで、神と個人的な会話をしなさいと言われました。その同じ御声が、私たちは互いに一緒になつて祈るべきであるとも言われたのです。

あなたは、祈るときには自分の奥まつた部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。(マタ6・6)

主が天に昇られたとき、百二十人の兄弟姉妹が十日にわかつて持った祈り会において、教会の誕生が起こりました。

民を集め、集会を召集せよ。老人たちを集め、幼子、乳飲み子も寄せ集めよ。花婿を寝室から、花嫁を自分の部屋から呼び出せ。主に仕える祭司たちは、神殿の玄関の間と祭壇との間で、泣いて言え。「主よ。あなたの民をあわれんでください。あなたのゆずりの地を、諸国の民のそしりとしたり、物笑いの種としたりしないでください。国々の民の間に、『彼らの神はどこにいるのか。』と言わせておいてよいのでしょうか。」

(ヨエ2・16、17)

こうしてペテロは牢に閉じ込められていた。教会は彼のために、神に熱心に祈り続けていた。

(使12・5)

パンテコステの日は、一致した忍耐強い祈りの実であつたのです。主イエスさまを喜ばせようとするすべての人は、教会のために力ある聖靈の贈り物を望むすべての人は、神の子どもたちとの親しい交わりの祝福を受けたいと願うすべての人は、自ら祈り会に加わり、主がご自身のみことばを実現して、特別の祝福を与えてくださることを立証しようではありませんか。

祈り会に積極的に参加しましょう。そうすれば祈り会は主がそなへるべく望んでおられるものになるでしょう。

祈り会が効果的になるためのポイントは、まず何よりも、私たちが望んでいる事柄についての一一致が無ければならないということです。私たちが本当に神から与えて頂きたいと望んでいることがあるはずで、これについて私たちは一致していなければなりません。争い、ねたみ、立腹、愛の欠如は力を失わせますから、祈り会のメンバーの間には、内なる愛と一致があるべきです。

それはまたシオンの山々におりるヘルモンの露にも似ている。主がそこにしてしえのいのちの祝福を命じられたからである。

(詩133・3)

その日、その時、…主の御告げ。…イスラエルの民もユダの民も共に来て、泣きながら歩み、その神、主を、尋ね求める。彼らはシオンを求め、その道に顔を向けて、「来たれ。忘れるることのない」としえの契約によって、主に連なろう。」と言つ。(エレ50・4、5)

だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。(マタ5・23、24)まことに、あなたがたにもう一度、告げます。もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つに

して祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。(マタ18・19、20)

また立つて祈つているとき、だれかに対して恨み事があつたら、赦してやりなさい。そうすれば、天におられるあなたがたの父も、あなたがたの罪を赦してください。

(マル11・25)

その上で、願い求める明確な目標についての合意がなればなりません。

これを聞いた人々はみな、心を一つにして、神に向かい、声を上げて言つた。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」(使4・24)

祈りの目標の合意というゴールに到達するために、祈り会で何について祈るかを人々に伝えておくことは、全く適切なことです。メンバーの一人は、特別な必要に直面しているかも知れません。他の人々は、失われた人々の回心、神の子どもたちのリバイバル、教師が聖靈に満たされること、神の国の中進展などのもつと一般的な必要を出そうと思っているかも知れません。ですから、祈りの目標を前もって公表しましよう。人が、これらの目標を祈るために参加することに満足しているからといって、そこに一致があると思つてはなりません。そうではなくて、祈りの目標を私

たちの心と生活の中に持ち込まなければなりません。それらをいつも主の前に持ち出して、主が彼らに与えてください。その時私たちは、力あるよう密かに切望してください。その時私たちは、力ある祈りの途上にいるのです。

効果的な祈り会の二つ目のポイントは、イエスさまの御名のもとに、主のご臨在を覚えて、共に集まることです。聖書は「**主の名は堅固なやぐら。正しい者はその中に走つて行つて安全である。**（箴18・10）」と言っています。

名前は人を表します。私たちが集まるとき、キリスト者は、イエスの御名を自分たちの要塞また住まいとするために、その御名の中に入るべきです。

この御名の中に、御父の御前で共にとどまり、この御名から祈るのです。実にこの御名は、私たちを互いに一つにします。私たちがこの御名の中にいるとき、生ける主はそのただ中におられます！そして主は、これが、御父が私たちの祈りを聞いてくださる理由であると言われます。

わたしは、あなたがたがわたしの名によって求める」とは何でも、それをしましよう。父が子によって栄光をお受けになるためです。あなたがたが、わたしの名によって何かをわたしに求めるなら、わたしはそれをしましよう。

（ヨハ14・13、14）

その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねません。まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたが父に求めることは何でも、父は、わたしの名によつてそれをあなたがたにお与えになります。あなたがたは今まで、何もわたしの名によつて求めたことはありません。求めなさい。そうすれば受けるのです。それはあなたがたの喜びが満ち満ちたものとなるのです。

（ヨハ16・23、24）

私たちは主の中におり、主は私たちの中におられます。そして、主から私たちは祈ります。私たちの祈りは、主の力で御父の御前に届きます。そうです。イエスさまの御名を私たちの祈り会の要、また集まる所としましょう。そうすれば、主が私たちのただ中におられることを、私たちは意識するでしょう。

主が私たちに語つておられる一致した祈りについての三つのポイントは、私たちの求めは、天の父によつて成し遂げられる、ということです。祈りは確かに答えられます。

私たちはこの時代においても「**エリヤの神、主は、どい**」に**おられるのですか？」（2列2・14）**と叫んでよいのです。なぜなら、主は答えてくださった神なのですから。

「**答える神、その方が神である。**」（1列18・24）とエリヤは民に言いました。そして彼は神に申し上げました。「**私に答えてください。主よ。私に答えてください。**

「この民が、あなたこそ、主よ、神である」とを知るようにしてください。」
(1列18・37)

ですから、あなたがたは、互いに罪を言い表わし、互いのために祈りなさい。いやされるためです。義人の祈りは働くと、大きな力があります。

(ヤコ5・16)

祈りが答えられなくても私たちが満足するとき、ほとんど答えは与えられません。しかし、私たちの祈りに答えることは神の喜びの表現であることを理解し、私たちが答えのないことに満足しようとしない時、私たちは自分たちの祈りに何が欠けているかを見出し、答えが与えられるように祈ろうと努めるでしょう。私たちは次のことを信じなければなりません。主は答えを与えることを楽しめます。主の民がイエスさまの御名に入り、御名から祈り、主が彼らの望むものを与えることがおできになることは、主の喜びなのです。

あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してくださいでしよう。それは、多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。
(2コリ1・11)

新しい信仰者の方々。あなたがどんなに若く弱いとしても、祈り会は、祈りによる助けをあなたに供給するために備えられた神の制度の一つなのです。誰もが祈り会を用いましょう。誰もが祈りと信頼の心で、主の御名どご臨在を

求めて参加しましょう。誰もが他のキリスト者とともに生き、ともに祈ることを求めましょう。そして、誰もが祈りに対する輝かしい答えを見させていただくことを期待しましょう。

祈り

恵み深い主イエスさま。公に他の人々と共に祈るだけではなく個人的にも祈るように語られたあなたは、いつでも一方の祈りの習慣によって、他方の祈りの習慣を補い強めることで、より価値のあるものとされます。奥まつた部屋(での祈り)が私たちを整え、祈りの中であなたの民が結び合わされることの必要性に目覚めさせてください。あなたのご臨在が私たちの祝福となりますように。そしてあなたの民との交わりが、答えを期待して受け取るようにならうかを調べましょう。そして、主の御名によって祈り会を始めましょう。

課題

一、祈り会の必要がある多くの場所があります。すべての読者の皆さんには、自宅の近隣でそのような必要がないかどうかを調べましょう。そして、主の御名によって祈り会をすべての読者のみなさんに質問させてください。あなたの地域に祈り会がありますか？あなたはその祈り会に、

忠実に参加しておられますか？あなたは、主のご臨在と主が祈りを聞いてくださることを経験するために、イエスさまの御名のもとに神の子どもたちとともに集まることが、どういうことであるかを知っていますか？

二、あなたは、話し合いをし、それから祈るための起点としてこの本を用いたいと望まれるかも知れません。一つの章を読み、いくつかの箇所を再吟味し、それについて話し合うことができるでしょう。これは、祈りの材料を与えてくれるでしょう。

三、「祈り会は、奥まった部屋での祈りに悪影響を与えないのでしょうか？」という質問を時々受けることがあります。私の経験は、この結果どちらか反対です。祈り会は祈りの学校です。弱い人々はもつと進んだ人々から学びます。祈りの材料が与えられます。自分自身を見つめ直し、より一層祈るために励ましを受ける機会があります。

四、人々に、祈りの明確な目標を告げるよう求めるべきであることを、覚えておきましょう。その目標は、答えられることが確実に信頼をもつて期待できるものであり、答が与えられたときにはそれを知ることができるものです。そのように告げることは、一致と、信仰をもつて期待することとを大いに促します。

36 主を恐れること

幸いなことよ。主を恐れ、その仰せを大いに喜ぶ人は。その人は悪い知らせを恐れず、主に信頼して、その心はゆるがない。その心は堅固で、恐れることなく、自分の敵をものともしないまでになる。 (詩112・1、7、8)

教会は、…主を恐れかしこみ、聖靈に励まされて前進し続けたので、信者の数がふえて行つた。 (使9・31)

聖書は、「恐れ」という言葉を二重の意味で使つています。ある箇所では、それは何か悪いこととか、罪深いこととして恐れを説いています。そして、最も強い語調で、恐れることを禁じています。

あなたがたは、人を再び恐怖に陥れるような、奴隸の靈を受けたのではなく、子としてくださる御靈を受けたのです。私たちは御靈によつて、「アバ、父。」と呼びます。 (ロマ8・15)

いや、たとい義のために苦しむことがあるにしても、それは幸いなことです。彼らの脅かしを恐れたり、それによつて心を動搖させたりしてはいけません。

(1ペテ3・14)

「恐れるな」というみことばはおよそ百カ所に出でています。一方、他の多くの箇所で、恐れが、主に受け入れられる、私たちへの祝福をもたらす、信仰深さの眞の表現の一つとして称えられています。

主を恐れる人々よ。主を賛美せよ。ヤコブのすべてのすえよ。主をあがめよ。イスラエルのすべてのすえよ。主の前におののけ。大会衆の中での私の賛美はあなたから出たものです。私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。 (詩22・23、25)

神の民は、「主を恐れる人々」という名を身に負っています。この二つの恐れの違いは、一つは不信仰の恐れであり、もう一つは信仰である、という単純な事実です。恐れが神に信頼することの不足に関係しているところでは、恐れは罪深く、とても有害です。

イエスは言われた。「なぜ」「わがるのか、信仰の薄い者たちだ。」 (マタ8・26)

おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にあります。これが第二の死である。 (黙21・8)

一方、神への信頼と希望とに結ばれた恐れは、靈的生活に絶対欠かすことができません。人が恐れに囚われる」と

は、その目的は一時的なことなのですが、強く非難されま
す。子どものような信頼と愛で御父を敬う恐れが命じられ
ています。

**見よ。主の目は主を恐れる者に注がれる。その恵みを待ち
望む者に。**

(詩33・18)

主を恐れる者と御恵みを待ち望む者とを主は好まれる。

(詩147・11)

聖書の中で祝福と力の源として示されているところの主に
対する恐れは、奴隸のようにではなく子どものように信頼
することです。主を恐れる者は、他の何ものも恐れませ
ん。主を恐れることは、すべての知恵の初めです。主を恐
れることは、神の顧みと守りを享受する確かな道です。

**私は、神に信頼しています。それゆえ、恐れません。人
が、私に何をなしえましょう。**

(詩56・11)

**愛する者たち。私たちは」のような約束を与えられている
のですから、いつさいの靈肉の汚れから自分をきよめ、神
を恐れかし」「んで聖きを全うしようではありませんか。**

(2コリ7・1)

信仰に至る以前に、しつけによつて主を恐れるように導か
れている何人かのキリスト者がいます。これは大きな祝福

です。両親は、子どもが主を恐れるように育てること以上
の大きな祝福を、子どもに与えることはできません。彼ら
が信仰に導かれる時、彼らは大きな強みを持ちます。彼ら
は、言わば、主の喜びの中を歩む用意ができるのです。
反対に、この備えのない人たちが回心する場合には、
この聖なる恐れを求める、そして目覚めて祈るために、特別
の教えと用心が必要です。
この恐れを構成している特質は、沢山あります。その主な
ものは次の通りです。

神の輝かしい尊厳の御前、聖そのものであられるお方の御
前に出ているという聖なる崇敬と畏れ。これらは、神がど
なたであるかを忘れたり、神を神として心を尽くして崇め
ようとしない浅薄さから私たちを守ります。

**私は、豊かな恵みによって、あなたの家に行き、あなたを
恐れつつ、あなたの聖なる宮に向かってひれ伏します。**

(詩5・7)

「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に
満つ。」…私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私は
くちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んで
いる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだか
ら。」

(イザ6・3、5)

自分自身を恐れ、神への深い信頼が自分自身に全く信頼し
ない」とと結びついた深いへりくだり。自分の心の巧妙さ

を知つて弱さを自覚している人はいつも、神のみこころと好意に逆らつて何事かをすることを恐れます。そのような人は神を恐れているので、神の守りにしつかりと依り頼みます。そしてこの同じへりくだりが、他の人々と語りあうすべての場合に、その人を鼓舞するのです。

そのとおりです。彼らは不信仰によつて折られ、あなたは信仰によつて立っています。高ぶらないで、かえつて恐れなさい。

(ロマ11・20)

用心深き、警戒心。敬虔に先のことを考慮することであつて、正しい道を知ることを求め、敵を見張り、あらゆる軽薄で軽率な会話や決断、振る舞いから守られることを求めることがあります。

(箴2・5、11)

知恵であるわたしは分別を住みかとする。そこには知識と思慮とがある。主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おこりと、惡の道と、ねじれたことばを憎む。

(箴8・12、13)

それは、あなたの一生の間、あなたも、そしてあなたの子も孫も、あなたの神、主を恐れて、私の命じるすべての主のおきてと命令を守るため、またあなたが長く生きることのできるためである。

(申6・2)

見よ。神は私の救い。私は信頼して恐れることはない。ヤハ、主は、私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。

(イザ12・2)

そして、この恐れから喜びが生まれます。「おののきつつ喜べ。(詩篇2・11)」主を恐れることは、深く安定した喜びをもたらします。恐れが根で喜びが実です。恐れが深ければ深いほど、喜びは大きいのです。この理由から次のように語られています。「主を恐れる人々よ。主を賛美せよ。(詩篇22・23)」「主を恐れる者よ。主をほめたたえよ。(詩135・20)」

新しい信仰者の方々。私たちの御父の御声を聞いてください。「主を恐れよ。その聖徒たちよ。(詩34・9)」主への深い恐れと、主を不快にしたり悲しませたりするようなものすべてを厭う思いで、あなたを満たしてください。そうすれば、私たちはどんな悪をも恐れることはないでしょう。主を恐れ、主をお喜ばせすることは何でもしたいと

努める人々のためには、神もまた彼らの望むすべてのことをしてくださいます。神を子どものように信頼する恐れは、あなたを神の愛と喜びに導きます。一方、奴隸のような不信仰で臆病な恐れは全く捨て去られるのです。

祈り

ああ。私の神よ。私の心がひたすらあなたの御名を恐れるものでありますように。主を恐れ、主の慈しみに望みを掛ける人々の中に、私がいつもいることができるように。アーメン。

課題

一、神を恐れることの祝福は何ですか？

あなたは彼らを人のそしりから、あなたのおられるひそかな所にかくまい、舌の争いから、隠れ場に隠されます。

(詩31・20)

主を呼び求める者すべて、まことをもつて主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。また主を恐れる者の願いをかなえ、彼らの叫びを聞いて、救われる。

(詩145・18、19)

主を恐れる」とは知識の初めである。愚か者は知恵と訓戒をさげすむ。

主を恐れることはいのちの泉、死のわなからのがれさせる。
(箴14・27)

どの国の人であっても、神を恐れかしこみ、正義を行なう人なら、神に受け入れられるのです。(使10・35)

二、私たちが神を恐れなければならない理由は何ですか？

あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。：

あなたの神、主を恐れ、主に仕え、主にすがり、御名について誓わなければならない。主はあなたの賛美、主はあなたの神であつて、あなたが自分の目で見たこれらの大引き、恐ろしいことを、あなたのために行なわれた。

(申10・17、20、21)

主よ。あなたに並ぶ者はありません。あなたは大いなる方。あなたの御名は、力ある大いなるものです。諸国の民の王よ。だれかあなたを恐れない者がありましょうか。それは、あなたに対しても当然なことです。諸国の民のすべての知恵ある者たちの中にも、そのすべての王国の中にも、あなたと並ぶような者はいないからです。

(エレ10・6、7)

からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、

ともにゲヘナで滅ぼす」とのできる方を恐れなさい。

(マタ10・28)

彼らはみな、あなたに告げて言う。「あなたもまた、私たちのように弱くされ、私たちに似た者になってしまつた。」

(イザ14・10)

三、魂を恐れで満たすのは、特に、神の偉大きさ、力、栄光において神を知ることによります。しかしそのためには、私たちには神の御前に静まり、自分の魂のために時間をかけて、神の尊厳の影響下に来なければなりません。

四、「主は…私をすべての恐怖から救い出してください」た。(詩34・4)これは、あなたが妨げられているあらゆる種類の恐れに当てはめることができますか?

人に対する恐れがあります。

まことに、万軍の主の日は、すべてお」り高ぶる者、すべて誇る者に襲いかかり、これを低くする。高くそびえるレバノンのすべての杉の木と、バシャンのすべての櫻の木、

(イザ2・12、13)

厳しい苦難への恐れがあります。

「慰めよ。慰めよ。わたしの民を。」とあなたがたの神は仰せられる。「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと。」(イザ40・1、2)

私たち自身の弱さについての恐れがあります。

神のみわざに与ることに対する恐れがあります。

それから、ダビデはその子ソロモンに言った。「強く、雄々しく、事を成し遂げなさい。恐れてはならない。おののいてはならない。神である主、私の神が、あなたとともにおられるのだから…。主は、あなたを見放さず、あなたを見捨てず、主の宮の奉仕のすべての仕事を完成させてくださる。」(1歴28・20)

死に対する恐れがあります。

たとい、死の陰の谷を歩く」とがあつても、私はわざわいを恐れません。あなたが私とともにおられますから。あなたのむちとあなたの杖、それが私の慰めです。

(詩23・4)

五、あなたは今はもう、「幸いな」とよ。主を恐れ…その心は堅固で、恐れる」となく…。」(詩112・1、8)
というみことばを理解しましたか?

37 一つ心で獻げること

イタイは王に答えて言つた。「主の前に誓います。王さまの前にも誓います。王さまがおられるところに、生きるためにも、死ぬためでも、しもべも必ず、そこにはいます。」

(2サム15・21)

そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

(ルカ14・33)

それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。

(2コリ6・17、18)

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知つてゐることのすばらしさのゆえに、いつさいのことを損と思つています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

(ピリ3・8)

主に明け渡すこと（降伏、放棄、分離）は、いつもキリスト者にとつて新しい深い意味を得ることだということはす

で述べました。キリスト者は、この明け渡しが、いつも全くただイエスさまのためだけに生きる、完全で全面的な献身以外の何物でもないことを理解するようになります。神殿が神ひとりへの礼拝に完全に献げられるほど、すべての人は、神殿がそのためにだけ存在していることを知るようになりました。同様に、祭壇上の献げ物は神の命令のみに基づいて用いることができました。そして神が語られたこと以外には誰も、その一部分でさえ処分する権利を持ちませんでした。そのように、あなたはあなたの主のものであり、主へのあなたの献身は分かたれたものであつてはならないのです。神はイスラエルをご自身の所有とするために贖われたことを、いつも心に留めておられます。

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの靈的な礼拝です。

(ロマ12・1)

あなたがたは神の神殿であり、神の御靈があなたがたに宿つておられることを知らないのですか。もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です。

(1コリ3・16、17)

これが何を意味しているかを考えましょう。

そこには、イエスさまとの個人的な結びつきと、主との個人的な交わりがあります。主は、私たちの魂の最愛のお方であり、望みであり、喜びです。また、そうでなければなりません。私たちのなすべき献身は、神への奉仕に対してもなく、私たちの友であり王であられる主イエスさま、私たちの贖い主であり神であられる主イエスさまに対してなのです。

わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。

(ヨハ14・21)

イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたはわたしを愛しますか。」と言われたので、心を痛めてイエスに言つた。「主よ。あなたはいつさいのことを」存じです。あなたは、私があなたを愛することを知つておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」

(ヨハ21・17)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のために「自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によつているのです。

(ガラ2・20)

完全な献身の生活を送るための条件を整えることができるのには、個人的な心からの愛の靈的な強い願いだけです。イエスさまは、たびたび次のことばを使われました。「わたしのために」、「わたしについて来なさい」、「わたしの弟子」。主が中心点でなければなりません。

：わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います。：：わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。

自分の十字架を負つてわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。：：あなたがたを受け入れる者は、わたしを受け入れるのです。また、わたしを受け入れる者は、わたしを遣わした方を受け入れるのです。

(マタ10・32、33、37、38、40)

主は、「（）自身を与えてくださいました。主を持ちたいと望むこと、主を愛すること、主により頼むことは弟子の特徴です。

そこで、公の告白（信仰告白）があります。誰かに与えられたものが、その人のものであることをすべての人々に認めてもらうということです。主のものとなることは、その人の栄光です。一人の魂の贖いを通して、主イエスさまが大いなる恵みを明らかにされるとき、主はこ

の世がそれを見て知るようになります。主はその（恵みの）所有者として知られ崇拝されます。主は、主に属するすべての人が、主を王として（人々に）告白することを望んでおられます。

私と私の家とは、主に仕える。

（ヨシ24・15）

この公の告白なくして、明け渡しは不熱心なものでしかありません。

この公の告白の一部として、私たちが主の民と交わり、彼らを私たちの家族として認めることも求められています。主が与えてくださった新しい命令、すべての人々が、それによつて私たちが主の弟子であることを認めるようにしなさいという表現で与えられた命令、それは兄弟愛です。神の子どもは地域においては少なくとも、あるいは軽蔑されても、あるいは弱点だらけであつても、私たちはそれに繋がらなければなりません。彼らを愛し、彼らと親しくし、祈り会やその他において自分からそれに加わりましょう。彼らを熱心に愛しましよう。兄弟愛は、神の愛と内住のために心を開く不思議な力を持つています。

わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

（ヨハ15・12）

大ぜいいる私たちも、キリストにあつて一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。（ロマ12・5）しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かつて、「私はあなたが必要としない。」と言つことはできないし、頭が足に向かつて、「私はあなたを必要としない。」と言つこともできません。

（1コリ12・20、21）

罪とこの世からの分離も、完全な献身に属しています。不潔なものには触れないようにします。この世は悪魔の力の支配下にあることを知りましょう。世のものをどれだけ失わないでおれるかなどと尋ねるのは止めなさい。何が罪で何が許されるかなどと尋ねるのは止めなさい。許されていることであつても、信者は全く神のために生きることができます。しづしづ進んで放棄します。

ですから、もし食物が私の兄弟をつまずかせるなら、私は今後いつさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまずきを与えないためです。

（1コリ8・13）

また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者に

なるような」とのないためです。 (1コリの・25、2
7)

すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが有益とはかぎりません。すべてのことは、してもよいのです。しかし、すべてのことが徳を高めるとはかぎりません。

(1コリ10・23)

兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合つてゐる者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。

(2テモ2・4)

主イエスさまに完全に似た者となるためには、おきてに適つたことからですら離れることが、しばしば不可欠です。神とその聖さのために、本当に取り分けられた者として生活しましよう。イエスさまのためにあらゆるもの損失と考え方放棄した人は、地上の人生においてさえも百倍のものを受け取るのです。

イエスは彼らに言われた。「ま」と、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」 (ルカ18・29、30)

ま」と、ま」と、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保つて永遠のいのちに至るのです。

(マルコ12・24、25)

そして、私が手放したものを使います。完全な献身は、私たちが神と神の働きのために役に立ち、ふさわしくなることに目を向けます。神が私たちを必要としておられるかどうか、また大いなる祝福としてくださるかどうかと、決して疑つてはなりません。ただ率直に自分自身を神の御手に差し出しなさい。神が、神の祝福、神の愛、神の御靈で私たちを満たしてくださいるように、私たち自身を神にお獻げしなさい。

ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを見離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとつて有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。

(2テモ2・21)

完全な献身を求めるこの命令は私たちにとつてあまりにも重すぎると恐れないようにしましょう。私たちは、要求ばかりして何の力も与えることのない律法の下にいるのではありません。私たちは、要求されるものを生み出してくださる恵みの下にいるのです。

神は、あなたがたを、常にすべての「」とに満ちたりて、すべての良いわざにあふれる者とするために、あらゆる恵みをあふれるばかり与える」とのできる方です。

(2コリ9・8)

御父は、私たちのためにすべてのことを行うお方としてイエスさまを与えて下さいました。このイエスさまに対する私たちのひとつひとつ明け渡しは、初めて明け渡した時のように新鮮な献げ物です。献身は信仰のわざであり、すばらしい信仰生活の一部です。この点で、私たちは次のよう言わなければなりません。「これをしているのは私ではなく、私のうちにある神の恵みです。私は、私の内に志を立てさせ、事を行わせてくださる主を信じる信仰によって生きるのです。」

ところが、神の恵みによつて、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。

(1コリ15・10)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のために「自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によつているのです。

(ガラ2・20)

祈り

聖なる主イエスさま。あなたがご自身のために、いかに完全に私を所有しておられるかを、私が理解できるように、私の心の目を開いてください。私の心の奥深く隠されたところで、一つの力が私を占領し、所有し続けますように。あなたが私の王であられ、私があなたのみこころだけを求めていることを、すべての人々が知りますように。私のこの世からの分離において、あなたの民とあなたののみこころに対する私の自己放棄において、私が完全に…そうです完全に…主のものであることが明らかになりますように。アーメン。

課題

一、神が私たちの心の目を明るくして見えるようにしてくださることを望むキリスト者の生活にとって、主が望んでおられる完全な献身ほど、重要なことは他にはありません。神がどれほど完全に私たちの意志を所有して、私たちの内に住みたいと望んでおられるか、私たち自身の思考によつては想像しがたいことを、私は自分自身と他の人々に見出します。聖霊は、このことを私たちに明らかにされな

神は、み「」るのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。

(ピリ2・13)

ければなりません。そうであつて初めて、自分たちがいかにこのことを理解していないかという自覚が生まれるのです。」私たちは、「私は、いかに完全に神のために生きるべきかということは知つていて。しかし、それを成し遂げることはできない。」と考えるべきではありません。そうではなく、私たちはこのように言うべきです。「私たちは相変わらず目が見えません。神がすべてである人生の栄光を、私はまだ見ていないのです。」と。もし私がそれを見たなら、神だけがそれを私の内に働かせることがおできになると強く望み、信じるでしょう。

二、完全にただ主のものとして生きるために、神に自分自身をささげるべきかどうかについて、あなたの心の中にはいささかの疑念もあつてはなりません。この心の確信をしばしば神の前に言い表わしなさい。あなたは、それがどういう意味を持っているかを、まだよく理解してはいなけれども、そういうことを熱望していることを認めましよう。神の完全な所有として、あなたを封印し証印を押してください。聖靈により頼みましよう。あなたがたとえつまづき、わがままに気づいても、自分の誠実を尽くしましよう。そして、自分の心の深くでしつかりと選択しているのは、すべてのことにおいて神に対して生きることであると再確認しましょう。

三、主に献身し、主のためにすべてを献げる力は、主があなたのためにすべてを献げられ、主があなたのすべてであ

るという事実から生まれることに、いつも目を留めていましょう。主があなたのためにしてくださったことに対する信仰は、あなたが主のために行うための力なのです。

38 信仰の確信

彼（アブラハム）は、不信仰によつて神の約束を疑つような「とをせず、反対に、信仰がますます強くなつて、神に栄光を歸し、神には約束されたことを成就する力がある」とを堅く信じました。 （ロマ4・20、21）

子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと眞実をもつて愛そうではありますか。それによつて、私たちは、自分が眞理に属するものであることを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。

（1コハ3・18、19）

神が私たちのうちにおられるといふことは、神が私たちに与えてくださった御靈によつて知るのです。

（1コハ3・24）

すべてのキリスト者は、信仰の保証を必要としています。つまり、主が私を受け入れてくださり、私を神の子どもとしてくださつたということを、完全に疑いの余地なく信じることです。私たちが贖われた者であり、神の子どもであり、永遠のいのちをいただいていることを知つている者として、聖書はいつもキリスト者に語りかけています。

きょう、あなたは、主が、あなたの神であり、あなたは、主の道に歩み、主のおきてと、命令と、定めとを守り、御声に聞き従うと断言した。きょう、主は、こう明言された。あなたに約束したとおり、あなたは主の宝の民である。 （申26・17、18）

ですからあなたがたはもはや奴隸ではなく、子です。子ならば、神による相続人です。 （ガラ4・7）

御子を持つ者はいのちを持つており、神の御子を持たない者はいのちを持つていません。 （1ヨハ5・12）

父が彼を自分の子であると本当に認めているかどうかはつきりしない間は、子どもはどうしてその父を愛したり、父に仕えたりできるでしようか？私たちはこのことについて、前の章ですでに述べました。しかし、ときとして、無知や疑いから、キリスト者は再びやみに陥つてしまします。この理由から、私たちは、これをもう一度取り上げましょう。

聖書は、私たちがそれによつて確信を持つことができる三つのことを示しています。第一は、みことばに信頼することです。その後で、行いです。そして次に、これらの両方の中に、またともにおられる聖靈です。

第一は、みことばに信頼することです。アブラハムは私たちにとって、偉大な信仰の、また信仰の確信の模範です。彼が持っていた確信について、聖書は何と言っているでしょうか？

神が約束されたことは、神はまた成し遂げることがおできになることを、彼は全く確信していました。彼の期待したのは、神と神が約束されたことだけでした。彼は、神は語られたことを行わると信頼しました。神の約束は、彼の唯一の、しかし十分な信仰の確信でした。

そのあかしを受け入れた者は、神は眞実であるということに確認の印を押したのである。 （ヨハ3・33）

神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じました。だからこそ、それが彼の義とみなされたのです。

（ロマ4・21、22）

みことばに信頼することだけでは十分ではないと考える、多くの新しいキリストの方々がおられます。彼らは何かをさらに求めています。確信は、確かに内面の感情や固い信念として、信仰のさらに上に、それ以外に与えられるものであると、彼らは想像するのです。これは間違っています。私は完全な確信を与えてくれる信頼に足る人のことば以上のものを、私が何も必要としていないように、神のみことばは、私の確信でなければなりません。人々は自分自身で、そして自分の感情で、何かを探し求めるとき、間違いを犯すのです。そうではなくて、救いのすべては神から

来るので。魂は、それ自身やその行いに占領されるのではなく、神に占領されなければなりません。我を忘れて神の言わることを聞き、信頼に値するものとして神の約束に信頼する人は、この事実の中に十分な信仰の保証を持ちます。

神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさらないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか。

（民23・19）

このことは、わたしにとつては、ノアの日のように、わたしは、ノアの洪水をもう地上に送らないと誓つたが、そのように、あなたを怒らず、あなたを責めないとわたしは誓う。

（イザ54・9）

その人は約束を疑うことなく、信仰が強くなり、神に榮光を帰し、神は約束されたことを実行することがおできになることを完全に確信しているのです。

次に聖書は、行いという言葉についても言及します。純粹な愛によって、私たちの心に確信がもたらされます。

子どもたちよ。私たちは、ことばや口先だけで愛することをせず、行ないと眞実をもつて愛そうではありませんか。それによつて、私たちは、自分が眞理に属するものである

「ことを知り、そして、神の御前に心を安らかにされるのです。」
(1ヨハ3・18、19)

このことを注意深く観察してみましょう。約束に基づいた信仰による確信は、行いによらず、最初にやつてきます。恵みを受けた人は、このことをみことばだけから知ります。しかし、その後では、確信は行いに伴うのです。「信仰は行ないによつて全うされた。」

もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守つて、わたしの父の愛の中にとどまつているのと同じです。
わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。

(ヨハ15・10、14)

あなたの見ているとおり、彼の信仰は彼の行ないとともに働いたのであり、信仰は行ないによつて全うされたのです。
(ヤコ2・22)

どうか、私のいのちとしてイエスさまを信じましょう。そしてイエスさまの中に住みましょう。そうすれば、信仰の確信は決して私たちに欠けることはありません。

祈り

父なる神様。あなたの約束を喜んで信頼し、あなたの命令に喜んで従い、あなたとともにある生活の中で、信仰の保証を私が知ることができるように私を教えてください。あなたのご聖靈も私の靈とともに、私が神の子どもであることを証言してくださいますように。アーメン。

木は実の無い信仰という状態で植えられます。しかし、収穫のときが来ても、どんな実もならなければ、そのとき私は

は疑うでしょう。もし最初に、働きによらないただみことばに基づいた信仰の確信を保てば、行いがそれに続くのはより確かなことです。

そして、信仰による確信と行いによる確信のどちらも、聖靈によって与えられます。みことばによるだけではなく、私自身が行う何かの行いによるのでもなく、聖靈の手段としてのみことばによつて、また聖靈の実としての行いによって、神の子どもは、自分は主のものであるという天來の確信を持ちます。

神の命令を守る者は神のうちにおり、神もまたその人のうちにおられます。神が私たちのうちにおられるということは、神が私たちに与えてくださった御靈によつて知るのであります。
(1ヨハ3・24)

課題

一、信仰の保証の重要性は次の事実にあります。神の子どもとして、もし私が、神が私を愛しておられ、私を神の子どもとして認めてくださつてることを知らなかつたとしたら、私が神を愛して仕えることは、まづできません。

二、聖書全体は、信仰の確信に対する一つの偉大な証明です。アブラハムとモーセは、神が彼らを受け入れておられることを、大変よく知つていました。そうでなければ、彼らは神に仕え、信頼することができませんでした。イスラエルは、神が彼らを贖われたことを知つていました。そのゆえに、彼らは神に仕えなければなりませんでした。

新約聖書におけるさらに偉大な贖いは、ずっと大きな信仰の保証となつてているのではないでしようか？すべての書簡は、自分たちが贖われた神の聖なる子どもであることを知つて告白している人々に対し書かれています。

三、信仰と服従は、根であり果実であつて、分かちがたいものです。初めに、根がなければなりません。そして、根は果実の無い時期を過ごさなければなりません。その後やがて、実を結ぶ時期が来ます。初めに、神のみことばへの生きた信仰による確信の段階があり、まだ実はありません。そして、実を結ぶことがさらなる確信をもたらします。信仰の確信が、あらゆる疑いをしつかりと超越してい

ることは、イエスさまのご生涯に見られることがあります。

四、信仰の確信は、告白によつて助けられます。私が言い表わすことは、私にとつて、より明らかのこととなります。私はそれによつて確証を与えられるのです。

五、あらゆる心の疑いが取り除かれるのは、イエスさまの足もとで、イエスさまの愛のお顔を見上げ、イエスさまの約束に聞き入り、祈りにおいて、イエスさまと親しく交わる時です。主のご臨在の中に、信仰の完全な保証があるのです。

39 イエスさまに似たものとなること

神は、あらかじめ知つておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。

(ロマ8・29)

わたしがあながたにしたとおりに、あなたがたもするよう、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

(ヨハ13・15)

聖書は、二様の似ること、私たちが身に付ける二様の似姿について述べています。私たちは、この世に似るかイエスさまに似るかのどちらかです。一方は他方を閉め出し排斥します。イエスさまに似ることは、求められているものなのですが、他の何よりも、この世に似ることによって妨げられるのです。そしてこの世に似ることは、イエスさまに似ること以外の何によつても征服されることはないのです。

新しい信仰者の方々。あなたが与つている新しいのちは、天におられる神のいのちです。キリストにおいて、そのいのちが明らかにされ、目に見えるようにされたのです。永遠のいのちの働きと実とはイエスさまの中についたものであり、私たちの内にもあるようになるのです。イエスさまの生活の中に、永遠のいのちがあなたの中で働くであらうものをあなたは見ます。実にそういうことなのです。

あなたがたの間で人の先に立ちたいと思う者は、あなたがたのしもべになりなさい。人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえつて仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。 (マタ20・27、28)

弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。 (ルカ6・40)

生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によつて生きているように、わたしを食べる者も、わたしによつて生きるのです。 (ヨハ6・57)

神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。

(1ヨハ2・6)

「ことによつて、愛が私たちにおいても完全なものとなりました。それは私たちが、さばきの日にも大胆さを持つことができるためです。なぜなら、私たちもこの世にあつ

てキリストと同じような者であるからです。

(ヨハ4・17)

イエスさまの模範に真に倣うこと、そして内面においてイエスさまに似たものへと成長することについて、二つのことが特に必要です。ひとつは、私がこのことのために真に召されていることを明確に理解することであり、もうひとつは、それが私に可能であることを堅く信じることです。靈的な生活への最も大きな障害の一つは、神が私たちにそらうあるようにと望んでおられることを、私たちが知らず理解していないことです。私たちの理解力は、まだとてもわずかしか啓発されていません。私たちは真の礼拝について、まだ多くの人間的な考え方や想像を引きずっています。私たちは、私たちに教えることのできる唯一のお方である聖靈を待ち望むことについて、ほんのわずかしか知りません。私たちは、それが最も明白な神の言葉であっても、神が望んでおられるようには、私たちにとつてはその意味と力とを持たないことを認めていません。そして、イエスさまに似た者となるはどういうことなのか、イエスさまのように生きるために、どのように私たちが召されたのかを、私たちが靈的に理解できない限り、イエスさまに真に似ることなど、ほとんどあり得ません。私たちが必要とするのは、この点に関する天からの特別な教えです。

どうか、私たちの主イエス・キリストの神、すなわち榮光の父が、神を知るための知恵と啓示の御靈を、あなたがたに与えてくださいますように。

また、あなたがたの心の目がはつきり見えるようになつて、神の召しによって与えられる望みがどのようなものか、聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか、また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上において「自分の右の座に着かせられました。 (エペ1・17、20)

私たちがキリストに似た者となることについて、神が何を語り、何を望んでおられるかを知るために、聖書を熱心に調べ観察しましよう。

わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするよう、わたしはあなたがたに模範を示したのです。

(ヨハ13・15)

私たちは、この世の靈を受けたのではなく、神の御靈を受けました。それは、恵みによつて神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。この賜物について話すには、人の知恵に教えたことばを用いず、御靈に教えられたことばを用います。その御靈のことばをもつて御靈のことばを解くのです。 (1コリ2・12、13)

もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守つて、わたしの父の愛の中にとどまつているのと同じです。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合うこと、これがわたしの戒めです。

(ヨハ15・10、12)

あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。

(ヨハ17・18)

また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、「自身を神へのささげ物、また供え物」とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

(エペ5・2)

あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちに見られるものです。

(ローリ2・5)

互いに忍び合い、だれかがほかの人には満足を抱く」とがあるつても、互いに赦し合ひなさい。主があなたがたを赦してくださいたようにあなたがたもそうしなさい。

(コロ3・13)

このようなみことばを絶えずじっくりと考え、心の内に持ち続けましょう。私たちは、主が望まれるすべてのものと

なるために、自分自身をすっかり主にお委ねしているのだということを、確定したこととしておきましょう。そして、聖霊が私たちの心に光を与えてくださり、イエスさまが信じる者の内に働くことがおできになる生活の全容を、私たちに見させてくださいるように、信頼をもつて祈りましょう。

私がキリストを見なさいつているのに、あなたがたも私を見なさいつてください。

(1コリ11・1)

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。「これはまさに、御靈なる主の働きによるのです。

(2コリ3・18)

聖霊は、私たちが、イエスさまと全く同様に、御父のみこころと栄光のためにのみ生きるように、この世において主が生きられたように生きるようにさえ召されている」とを、私たちに確信させてください。

私たちが必要とするもう一つのことは、私たちが主の御姿を持つことは、ある程度正確性をもつて確かに可能であると信じることです。信じないことは、できないことの原因です。私たちには力がないために、主に似た者とされ得るとは信じられない、と私たちは考えます。この考えは、神のみことばと相反するものです。私たちは、自分自身の力で、イエスさまの御姿の通りに行動することはできません

ん。そうではありません。イエスさまが、私たちのかしらでありいのちです。主は、私たちの内に住んでくださり、主のいのちを内側から外に向かって、神の力で、聖靈を通して働かされます。

こうしてキリストが、あなたがたの信仰によつて、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基づき置いてあるあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。

(エペ3・17～19)

またこのことは、私たちの信仰から離れてはあり得ません。信仰は心の同意であり、主が働くために明け渡すことであり、主のみわざを受け入れることです。「あなたがたの信仰のとおりになれ。(マタ9・29)」が、神の国の基本的なおきての一つです。

イエスは言われた。「人にはできないことが、神にはできるのです。」(ルカ18・27)

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が、「この世に生きているのは、私を愛し私のために」「自身をお捨てになつた神の御子を信じる信仰によつているのです。(ガラ2・20)

不信仰が、全能の神のみわざと祝福を妨害するのにどれほどの力を持つているかは信じられないほどです。キリストの似姿に与ろうとするキリスト者は、この祝福が私たちの手の届くところにあり、それが全く可能な範囲内にあることを、堅く信じなければなりません。その人は、自分の分に応じて実際に似ることが可能であるお方として、イエスさまに目を向けることを学ばなければなりません。イエスさまにおられたのと同じ聖靈が、自分の中にも住んでおられることを、イエスさまを導き力づけられた同じ御父が、自分をも見守つていてくださることを、かつて地上で生きておられた同じイエスさまが、今自分の内にも生きておられることを、信じなければなりません。神が、自分を御子の似姿に変えるために働いていてくださるという強い確信を大切に受け取らなければなりません。

その日には、わたしが父におり、あなたがたがわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかります。(ヨハ14・20)

わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別れます。彼ら自身も真理によつて聖め別たれるためです。

(ヨハ17・19)

なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御靈の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。

(ロマ8・2)

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御靈なる主の働きによるのです。

(2コリ3・18)

また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。

(エペ1・19)

このことを信じる人はそれを受け取るでしょう。それは多くの祈りなくしては得られません。神とイエスさまとの途切れることのない交わりが必要です。そして、それを望み、喜んで時間を割き、自分を聖別する人は、確かにそれを受け取るのです。

祈り

神の御子なるイエスさま。神の栄光の輝き。神の本質の現れ。私はあなたの姿に変えられなければなりません。私があなたの中に、私たちがその形に創造され、また新たに創造されたところの神の形と似姿を見ます。主イエスさ

ま。あなたご自身に似た者となることを私の唯一の願い、唯一の望みとすることをお許しください。アーメン。

課題

一、イエスさまに似た者となること。私たちはこのみことばを理解していると思っていますが、神が本当に、私たちがイエスさまのように生きるべきであると期待しておられるということを、私たちは何と少ししか理解していないことでしょう。その思いを持ち始めるためには、主の模範について祈り、思いを巡らしながら、主と多くの時間を持つことが必要です。この主題で私は本を書きましたし、このことについてしばしば話しました。しかしそれでも時々、私は次のように叫ばなければならないと思うことがあります。『これは本当に真実だろうか？神は本当に私たちを、イエスさまのように生きるために召されたのだろうか？』と。

二、この世に似ることは、世との交わりによつて強められます。私たちは、イエスさまとの交わりの中で、主の考え方、主のみこころ、主のとられる方法や振る舞いを選び取ります。

三、イエスさまのご生涯の最大の特徴は、主が人類のために、ご自身を完全に御父にささげられたということです。イエスさまに似ているということの最大の特徴は、失われ

た人々が贖われ祝福されるために、神に自分自身をささげていることです。

四、主のご性質の最大の特徴は、子どもらしさでした。すなわち、御父に絶対的に依存しておられたこと、教えられることを心から喜ばれたこと、いつも御父のみこころを喜んで行おうとされておられたことでした。特にこれらのことをついて、主に似た者でありますよう。